

おねえちゃんはミラクルガール・真夏の第九

世田谷公園

世田谷公園のまん中に、なぞのモニュメントが建っている。台座からつぺんまで、家の二階ぐらいはあるだろう。白い幕をかぶっているから、中身はわからない。夏の日ざしがギラギラと反射して、とつてもまぶしい。突如、合衆国国家が鳴りひびいた。演奏しているのは、世田谷区立吹奏楽団だ。

このバカでかい銅像は、吹奏楽団がアメリカの大会で優勝して、その記念に在日米軍から贈られたものだそうだ。なんで在日米軍なのか、ぼくは知らない。演奏した曲は『星条旗よ永遠なれ』だったそうだ。

今日は銅像の除幕式がある。はじまるのは二時からだ。夏休みにもかかわらず、世田谷中の小学校から代表の生徒たちが集められて、きちんと整列させられている。

音楽が終わわり、えらい人の話をはじめた。

世田谷区長とか教育長とかが出てきて、日米友好のありがたい話をする。

長い。照りつける太陽と、下からわきあがる夏の熱気。セミの音がシャワーとなって、みんなを苦しめ、ぼくの顔や首から吹き出した汗が、土の上の、まっ黒な影の中へとだらだら落ちた。

長い話が終わり、またひとりえらい人が台の上で話を始めた。

「……というわけでして、アメリカ大使のご尽力で、このたびの銅像の贈呈となったわけです。大使は母国へ去られました。暑い。そろそろ誰か倒れるんじゃないかと思つたところ、防災無線からアナウンスが流れました。

「……」

「……」

ざわざわと声が出て、えらい人たちが集まりだした。ぼくと数人が呼び出されて、除幕式用の白いひもを持たされた。どうやら式典を終わらせるらしい。

やじ馬の中から、びゅいーっ！ という、指ぶえが鳴らされて、子どもたちの笑いをさそった。先生たちは苦い顔をしている。

涼しげなかつこうをした、ショートカットの女の子が手をふっている。あれは、ぼくのおねえちゃんだ。めずらしい銅像が立つといううわさをきいて、見物にきたのだ。ひまめ。

楽隊のファンファーレが鳴って、ぼくらはひもを引いた。白い幕がはらりと落ちて、台座の上に大きな銅像があらわれた。

「うっ……」

この時、ぼくはへんちくりんな顔をしてたと思う。ぼくだけじゃない。みんなそうだった。

「キモい……」

「ビミョー……」

つぶやくような声が、生徒たちのあいだに広がっていた。その銅像は三メートルぐらいはあるだろう。

なんていうか、胸を突きだしたスーパーマンみたいな、たくましいからだに、ドナルドダックのようなくちびるの顔のついている。冒険家のかつこうをして、両手に拳銃を持っているのだが、はつきりいつて、できの悪いアニメのようだ。

カウボーイの帽子をかぶり、そこだけリアルなふたえの目を、ぼつちりとウインクしている。毒どくしくて、ものすごく気味が悪い。

「うーん。アメリカン。」

木陰で木よりかきりながら、おねえちゃんが大きな声をだした。たしかにアメリカンだが、グロテスクつていうのじゃないだろうか。誰にいわれるともなく解散となり、生徒たちははてんで散らばりだした。

をつかんだまま、どうしていいかわからずにいる生徒が三人いた。

黒ぶちメガネの少年と、ひらひらの女の子に、バスケット選手みたいなスタイルの男の子だ。

おねえちゃんが近づいて話しかけてきた。ピンクのタンクトップを着て、下はショートパンツにサンダルだ。涼しき第一のかつこうをしている。

「あんたら、何、まぬけに突っ立ってるのよ。」

おねえちゃんは、からかい気味に笑った。

「これ、どうしたらいいかわかんないよ。」

「同じく。」

「そーなの。」

「おれもだ。」

後ろの三人も同じらしい。

「捨てちゃったら？」

おねえちゃんは無責任にいう。布地でつくった目立つひもだ。

ぼくは、おとなをさがした。

「あー、すいません。これどうしましょう。」

その時、ぼくの口から、あの「音声」が流れ出たのだ。「オー……ン……：ナマツシヴァアーヤ・マハーカーラ（大黒天）・スヴァーハー……」

意識して口に出しているのではない。この神聖な音声は、自然に口から出てくる。

おねえちゃんの胸のペンダント、「カウストウバ」が、緑色に怪しく光った。

まちがいない。おじいさんから、何か流れ出している。それは憎悪というか、憎しみの感情だ。黒い色が周囲の空気をそめて、見る見る広がってくる。

やがてその感情は荒あらしい物騒なものとなり、大きな波となって押し寄せてきた。嫌悪と怒り、おしはかれなほど深く強い感情が、強烈な津波となってぼくを飲み込んだ。いや、圧倒的にそんな風を感じられた。

突然、ものすごい爆発音とともに、黄色い閃光が走った。あまりの衝撃にぼくは耳をふさいだが、次の瞬間、熱波がおそってきた。銅像とあたり一帯に、煮えたぎる炎の柱がそそり立ち、何もかも炸裂してバラバラに飛び散る映像が、ぼくの目の前いっぱい広がり続けた。

鼓膜が破れるかと思う轟音が、二度、三度と続く。

逃げなくちゃ！
ぼくが思ったとき、おねえちゃんが、ぼくをかばって、いっしょに地面に倒れこんだ。頭の上を熱い爆風が吹いていく。振動が地面をつたわってきて、やがて静かになった。

また、セミが鳴いている。

何ごともなかったかのように、木の葉のあいだから、夏の日ざしが静かにふりそそいでいる。

いつもと変わらない、明るい青空だ。

「あ、あれ？」

おねえちゃんが、からだを起こした。

「今のは？」

ぼくに聞かれてもわからない。まわりの風景は、まったくもとのままだった。もちろん、銅像もそのままだ。

「ふたりそろって幻覚？ 何だろう。あ……」

おねえちゃんは胸のペンダントを見た。寶石が、うっすらと緑色に光っている。

「おねえちゃん。夜でもないのに『カウストウバ』が光ってるよ。今のは、あのおじいさんの心の中なのかも……」

「げげ、あのじーさん、爆弾テロでもやるっての？」

おねえちゃんが、寶石をにぎりしめてびびった。

「わかんないよ。でも、あのおじいさん、要注意だ。」

そこまで話したとき、ぼくらのまわりに、いっしょにひもを引いた三人がひっくり返ってるのに、気がついた。

メガネ少年と、ひらひら少女と、バスケット少年だ。

「なんだよ、今のスペクタクル映像は……」

「こわい、こわいわ！」

「あああ……」

みんなショックを受けている。たぶん、この、「カウストウバ」のちからが、近くの人間に作用したのだろう。

「あの人、何者なんだろう。」

おねえちゃんは胸のペンダントをにぎりしめた。

おねえちゃんには、普通の人にはない不思議な力がある。インドに旅行したとき、旅のお坊さんにももらった謎の宝石で身につけたのだ。正確に言うところ、もらったのは

ぼくで、おねえちゃんは横取りしたのである。

だから、おねえちゃんが力を発揮するには、ぼくの協力が必要だ。

※作者注 このあたりは「おねえちゃんはミラクルガール」をお読みください。

池尻の洋館

公園を出たおじいさんは、ひろびろとした都営団地の横を通りすぎ、たてこんでいる住宅街へと入っていった。

おねえちゃんとぼくは、その後をつけ、そしてなぜか、ぼくと同じひもを引っ張った三人までが、一緒についてきた。

「あんたら、どうしてついてくるのよ。」

おねえちゃんが、口をへの字に曲げた。

「さっきの爆発がなんだったのか、気になるじゃんか。

あのじーさん、きなくさいぜ。」

黒ぶちメガネのオタクっぽいやつが、電柱の影でぼそ

ぼそいった。

「きなくさいって？」

おねえちゃんも背中を壁につけて、怪しげに進んでいる。

「あのじーさんのしよってるごちゃごちゃしたもの、『はいのう』っていう、大昔の軍用のかばんだ。映画とかドキュメンタリーで見たことがある。この暑いのに、厚ぼつたい服を着てるが、あれは軍服だ。それから、足に布を巻きつけてるけど、あれは『ゲートル』という。」

つまりあのじーさんは、昔の軍人みたいなかつこうをしてるんだ。さっきの爆発といい、どう考えても怪しい人だ。」

メガネの講釈が終わった。みんななるほどという顔をした。

「君はなんでついてくるんだ？」

ぼくは、そばを歩いている、ひらひらの服とふわふわの髪の毛、かなりの美少女にきいた。

ところがその女の子は、ぼくのそばに、ぐーっと顔を近づけてきて、耳もとでささやいた。

「あ・な・た・に・興味があるの。さっきのすごいまぼろしを見たとき、あなただけ理由を知ってるみたいだった。あなたも、あっちのあなたのお姉さん？ ふたりとも何だか様子が変だったわ。理由を知りたいのよ。」

にっこりと美少女がほほえむと、ぼくはどきまぎしてしまった。

「何を話してんだよ。おまえら、仲良すぎ。」

その後ろの少年が、なんか本気で不満そうな顔をしている。しゃれたスポーツブランドを、バスケット選手みたいに着こなした、ちよつとキザなやつだ。

こいつがついてきた理由はなんとなくわかる。

「君もこのまま来るのか？」

「なんだよ、おれだけついてっちゃいけないのかよ。」

彼はぶいと横をむいた。

美少女がぼくの腕を引っばった。

「置いてかれそう。早く行きましよう。」

ぼくは彼女とくっついて前に進んだ。彼は、「あ、あ、あ」という声をあげた。要するに彼は、この女の子についてきたのだ。

おじいさんを見失ったのは、路地を曲がったところだった。その先はなんだかさびしげな感じで、両側の家やアパートがだんだん竹やぶに変わってきた。道は狭くな

り、みんなの姿がうす暗くなって、ちよつと心細くなつてきたころ、視界が開けてきた。

「天文台？」

おねえちゃんが声をあげた。

確かにドーム型の屋根が見える。

だが、本物の天文台より小さいし、ドームは屋根の一部だけだ。

やがて木のむこうに建物全体が見えてきた。古い大きな洋館らしい。むかしは立派な建物だったのだろうが、今はお化け屋敷のようだ。

洋館は、あちこち崩れていて修理されている様子もない。窓のガラスは割れており、茶色いレンガの壁の上を、めちやくちやに緑のツタがはつている。屋根まで草ぼうぼうで、ひどい状態だ。

何より不気味なのは、刑務所のように高いレンガ塀が、ぐるりと周囲をかこんでいることだ。

「ホントにここは池尻なのか？ もうちよつと行くと渋谷なんだぞ。」

黒ぶちメガネが、ぼうぜんとつぶやいた。

「あのおじいさんは、この中だね……たぶん。」

ぼくの直感はそういつていた。

「すてき……、あたし、こういう家にあこがれていたの……。いかにも何か出そうじゃない？」

美少女はどこか一本ぬけたことをいった。

「しかし、これからどうすんだよ。」

バスケットファッシュの少年が、林の中にある鉄柵の門に手をかけて、がちゃがちゃと鳴らした。内側からかんなぎがかかっている。

「この通り、この先は追跡のしようがないぞ。」

それはそうだった。鉄柵もそれにつらなるレンガ塀も、高さ五メートルはありそうだ。

「うーむ。こんなところに住んでるなんて怪人だ。」

黒ぶちは、そうとうあの老人に興味があるらしい。

「出てくるのを張りこんでみるか。」

「あらあ、それより鍵をさがしましょうよ。小鳥さんが教えてくれるかもしれないわ。」

「それは『秘密の花園』」

ぼくがツツコミを入れると、美少女が輝くような笑顔でふりむいた。

「そーなの。大好きなのあれ。あなたも？」

なんといいつていいかわからず、答えにこままっていると、バスケット少年が口をひらいた。

「この門には鍵はないぞ。おれがよじ登って、むこうがわへ飛びおりて、かんぬきを外してみる。」

「おい、やめておけ。本当にここにいるか、わかんないぞ。」

「だから行って見てくるさ。」

「ステキ、がんばって。」

「かなり高いぞ。いなかったらどうする。」

「いるつてば。」

ぼくらがごたごた言ってる時に、ピンポンという音が聞こえた。おねえちゃんが門の横のチャイムを押している。

みんなあつげにとられた。

「誰だ？」

インターフォンから老人の声が聞こえた。

「毎朝新聞でーす。新聞とつてくださいな。」

「いらん！」

インターフォンが切れた。

「いるみたいだよ。」

おねえちゃんがウインクした。

「中にいるのは確実なわけか……。」

黒ぶちが何か考えこんだ。

「よし。こいつを命綱にしよう。」

黒ぶちがふところから出したのは、除幕式の時の白ひもだった。おねえちゃんは、のけぞった。

「あつされた。捨ててなかつたの？」

「道ばたにゴミを捨てるなんて、公衆道徳に反することはできない。」

いいながら黒ぶちは、白ひもに石をくくり付けている。次にひもの反対はしを鉄柵の下のほうに固く結んだ。

「ほっ！」

彼は鉄柵の上に石を投げた。石は白ひもをなびかせながら門を越え、むこうがわの地面に落ちてきた。

「これでよし。」

黒ぶちはつぶやいた。

それから、彼は鉄柵の下から手をのぼして、白ひもをたぐり寄せ、しっかりとしぼりつけた。

「そうか。命綱か。」

ぼくは感心した。柵のこちらがわと、むこうがわに、

白ひもの命綱ができたことになる。

「わあ、頭いいんだ。すつこい。」

美少女が尊敬のまなざしで黒ぶちを見た。バスケット少年は苦しい顔をした。

黒ぶちがいった。

「命綱とはいってもあまり当てにするなよ。ロープじゃないんだ。体重を支えきれないかもしれない。」

「わかってるよ！」

バスケット少年はうさそうにさけび、鉄柵を登り始めた。

場所が高くなると、彼はからだを腕に白ひもを巻いた。いざとなったら、これをつかめばいい。

バスケット少年はどんどん登っていく。

「ねえ……。」

おねえちゃんが上を見た。

「柵のつぺんに、電流が流れてるつてことはないよね？」

「ぶっ！」

ぼくと黒ぶちが吹いた。考えてもみなかった。

「あつ、登り切るわ。」

美少女が指さす方を見ると、バスケット少年が手を開ける場所だった。

どうなるかと思ったが、彼は何ごともなく鉄柵をまたいだ。

「かつこいい！」

美少女の声にこたえて、彼は鉄柵の上で両手をふった。

彼はすんなりと柵を乗り越えたが、地面まであと三メートルというところで足をすべらせた。とっさに白ひもをつかんだが、黒ぶちが言ったとおり、体重全部は支えきれなかった。

ちよつと宙づりになったあと、ひもはビリリと切れ、バスケット少年は腰をしたたか打ちつけた。

「あだあだあだ。」

「だいじょうぶか？」

「な、なんとか。」

彼は鉄柵の門のかんぬきを外し、ようやく全員中に入ることができた。

見てはならないもの

屋敷の敷地へ足を踏み入れたあと、ぼくたち五人は建物の扉を開いた。

言いわけじゃないけど、ぼくは反対したんだ。いくらなんでも、ひとさまの家に侵入するのは犯罪だって。だけどみんな好奇心にとりつかれていた。

特におねえちゃんは、

「怪奇、軍人じいさんの謎がわかるねー！」

などとコープンしていたものだ。

「おじやまします……。」

そのおねえちゃんを先頭に、ぼくらは屋敷に潜入した。ぬきあしあしあしで五人は進んでいく。

中は薄暗くて外よりずっと涼しい。

玄関から広いホールに移動してみる。

こうして見てみると、家の中はそれほど荒れてはいない。古いものだがイスもテーブルもきちんと置いて、まぎれもなく、誰かが住んでいるようだ。

黒ぶちが右手の部屋のドアをのぞいた。

「こつちにはいない。」

小声で伝えてきた。

バスケットが左手の部屋のドアをのぞく。

「いない。」

片手を振った。

「二階なの？」

美少女が階段を見た。この屋敷は外国映画の館のように、ホールから二階に上がる階段がある。

「まって。まだ奥の部屋があるよ。」

おねえちゃんが、ホールの先の部屋を指さした。

「あつちはドーム型の屋根の下あたりだね。」

ぼくはさつき見た天文台のような屋根を思い出していた。

「あたしに続いて。」

おねえちゃんは勇ましく、みんなを率いて奥へと進んだ。

奥の部屋のドアは、半分ほど開いていた。

「いた。」

「シート！」

確かにあのじいさんは、その部屋にいた。ぼくらはた

ちまち五つの顔を、ドアの縁に縦にならべてのぞきこんだ。

鉄の円筒が天井のドームへ向かって伸びている。長さ八メートルはあるだろうか。といっても望遠鏡ではない。

それはどう見ても軍用の大砲だった。下の方は金属製の関節とかリングやパイプなどで複雑に構成されていて、角度を変える装置の上に乗っている。上の方は、灰色の砲身が何メートルも伸びていて、先へ行くほど細長くなっていた。

ほとんど天井ぎりぎりの巨大なものだ。

黒ぶちが何か言いたがって口をうごかしているが、言われなくてもわかる。この不気味な古めかしさは、おそらく第二次大戦中の砲だと思う。

あのじいさんは、砲身を布でふきながら、丸いハンドルをゆつくりと動かしていた。

「ヤバすぎる……。」

バスケットの口から声もれた。じいさんがこつちを振り返り、とつさにぼくらは隠れて凍りついた。

みんながじっとしている時、おねえちゃんがひとり後ろのほうへ、すたすたと歩き出した。ぼくらを置き去りにして逃げる気だ！

あわててバスケットが、そして黒ぶちも逃げ出した。もちろんぼくも、美少女の手を引っぱって逃げ出した。

すたすた歩きが小走りになり、ついに全員、玄関に向かつて駆けだした。

玄関の扉にたどりついたぼくらは、外へ飛び出そうとした。だが、扉は開かない。内側へ開けるのだったかとノブを引いたが、やはりびくともしない。

バスケットがこぶしで扉をたたきだした。つられて他の者も扉をたたいた。だが、扉は開かず、どんどんという音がホールに反響するだけだった。

ダダダダン！

突如、オーケストラの音がホール全体に鳴りわたった。ダダダダン！

また鳴った。この出だしはベートーヴェン交響曲第五番……

「運命の扉はたたかれたぞ。」

背後から老人の声がした。

「おまえたちはもう逃げられん。見てはならないものを見てしまったのだからな。」

数分のち、ぼくらはみなソファに座って『運命』を聴いていた。

どこかにオーディオセットがあつて、天井の隅にあるいくつかのスピーカーから音楽が流れている。曲はのどかな、そして時どき不安をのぞかせる、ゆつたりとした第二楽章だ。

老人がお茶をいれていた。ごつごつした手を使って、器用にきゆうすから湯飲み茶をそいでいる。頑健そうだからだの上に、きたない白髪でおおわれた顔がついて、まゆげの下から、ぎよろりとした目がのぞいている。

ほおもあごもひげでおおわれているが、顔じゅうに深いしわがぎざまれているのがわかる。迫力のある四角い顔からは、何を考えているのか、ぜんぜん読み取れない。

「さて、ガキども。ひとりずつ所属と姓名を名乗れ。」

老人が鋭い目をこつちへ向けた。

ぼくらは顔を見合わせていたが、老人にひとにらみされて、バスケット少年がしゃべりだした。

「羽根木小学校五年生、宮村トシキ。」

青ざめた顔でふるえている。それ以上言葉が出ない。続いて黒ぶちメガネが名乗った。

「おれは豪徳寺小五年、倉持ユタカだ。なあ、じいさん。あの奥の部屋にあるのは、太平洋戦争の時の高射砲だろ？」

黒ぶちはユタカという名前だった。高射砲というのは、飛行機を撃ち落とす、あの高射砲だろうか。

「よく知ってるな。いかにもそうだ。わが国最大級の高射砲だ。」

「それがなんで自衛隊じゃなく、こんなところにあるんだよ。危ないぞ、じいさん。」

「おまえの知ったことではない。それからわしのことは、『少尉ど』と呼べ。」

少尉だつて？ この人はやはり軍人だったんだ。

『少尉ど』にふるまわれたお茶をひと口飲んで、美少女が語りだした。

「わたしの名前は一条ユカです。成城小の五年生。これって宇治茶でしょう？ とてもおいしいわ。」

一条ユカはふわりといった。

「確かに宇治茶だが、子どものくせにお茶の味がわかるのか。」

「わかります。狭山茶や静岡茶とは違いますもの。少尉さん、とてもいい御趣味ですね。」

一条ユカはにっこりと笑った。

『少尉どの』は気がぬけたように首をふって、ぼくの方を見た。ぼくの番だ。

「ぼくは有馬城小五年、月波ケンジといいます。ねえ、少尉どの。不法侵入したのはあやまるから、ぼくらを家に帰してください……。」

そこまでいいかけたところで、横からおねえちゃんが出てきた。

「その姉の有馬城中一年、月波久子でえす。チャコって呼んでね！ どうも今日は弟が迷惑をかけてごめんなさい。この子ったら勝手に他人の家に忍びこんじゃって、あたし連れ戻しに来たんです。さあ、帰るわよ！」

「痛い、痛い！」

おねえちゃんはぼくの耳を強く引っぱった。なんというウソツキ。なんという猿芝居。みんなあつけにとられている。

少尉どのがゴホンとせきばらいした。いつの間にか曲の方は、悲しくて不気味な第三楽章に変わっている。

「わしはウソツキは好かん。なんじゃおまえは。子どものくせに化粧なんぞしておって。」

いつもはケバいいおねえちゃんも、この夏はナチュラルメイクだった。それでも大人には不評だろう（そりやそうだ）。

「時局風雲急を告げ、国難ここに迫る時に、銃後の守りをになうべき婦女子がなんたるかつこうをしておるのだ！」

ベートーヴェンの音がとんで、同じところをくりかえした。CDじゃなくて、レコードらしい。

「えーと、何のことでしょう。」

タンクトップのおねえちゃんは、ポカンとしている。「きちんとした身なりをしるっておる。子どもの身で化粧をし、男をまどわすように肌をさらすなど言語道断、モンペをはけ、モンペを！」

たたみかけられて、おねえちゃんが反抗的な目つきになった。ちよつとまずい。

「何いってんだか。夏は涼しいカッコするのは当たり前

でしょ！ エコだよエコ。夏なのにクソ暑いカッコしてるやつが冷房きかせて電気をムダ使いすんのよ！ あんたみたいなのが地球温暖化の原因になるっての！」

『少尉どの』は一瞬、気おされたが、すぐに反論した。

「冷房だと！ このわしが冷房なぞという軟弱なものを使うと思うているのか。わしは若いころ、それは暑いインドまで行ったんだぞ！」

「へっ、インド？」

「そうだ。皇軍が最も西へ進んだ作戦だ。多くの兵士が英霊となった大作戦である。」

「あ、おれ知ってる。インパール作戦っていうんだろ。」

黒ぶち——いや、倉持ユタカが目を輝かせた。

「本で読んだけど、補給もろくにない状態で、ビルマを出発してインドを攻撃したんだよね。食料の代わりにたぐさんの牛を連れてくという計画だったけど、雨季だったし、牛は進めないし、やたらたぐさんの兵士が泥の中で死んでいったって。」

それを聞いて少尉どのが爆発した。

「おまえなんか何がわかる！」

大きな声だったので、ぼくらは飛び上がった。

「ウ号作戦とはなあ……、ウ号作戦とはなあ……。」

少尉どの、ウッウツと、おえつをもらした。そしてあきれたことに、声を上げて泣きだしたのだ。

ぼくらのあいだにシラけた空気が流れた。とりなすように、おねえちゃんが声をかけた。

「ま、ま、おじーちゃん。あたしたちもインドに行ったことがあんのよ。」

「少尉と呼べ。なんだとインドへ？」

「そうなのよ。そこでこれをもらったの。」

ぼくはギョツとした。おねえちゃんが胸のペンダント、カウストウバクを出して見せている。他人に見せるものじゃない。

「ほお、美しい緑色じゃな。インド特産の宝石か？」

六角形の台座の上で、大きな石が落ちついた光をはなっている。

「そりやあもう、特産も特産、何しろ世界でただひとつの……あいだっ！」

ぼくはおねえちゃんの足を思いつきりけとばした。それ以上、余計なことは言わなくてよろしい。

バスケット——宮村トシキが、おそろおそろといった感じで口をひらいた。

「オレらは帰れないんでしようか？」

ちよつとふるえている。

「ふむ——。」

少尉どの威厳をとりもどし、思案するそぶりを見せた。

「おまえたちが、ここで見たこと聞いたことを誰にもしやべらないと約束するなら、帰してやらんこともない。」

倉持ユタカと宮村トシキは、「するする絶対する」と誓いまくった。もちろん、ぼくもだ。

「わたしはしゃべるかもしれないあ……。」

一条ユカのひとことに、男たちは凍りついた。

「あ、それ言える。ないしよにするって、つらいんだよね。」

おねえちゃんまで！ 空気の読めない人たちだ。

「それでは帰すわけにはいかなな。」

少尉どの仁王のような顔をして、ギロリとぼくらをにらんだ。そして「今夜は泊まっていけ」とみんなを二階にうながした。

ぼくら五人は、少尉どのに追い立てられるようにして、階段を上がった。

二階の雰囲気も一階とあまり変わらない。古い学校のような木の床に、廊下のいくつかの窓から、傾いた日差しが強く差しこんでいる。もうすぐ夕暮れだ。

突如、一条ユカがポケットからケータイを取り出した。「もしもし。ユカだけど、今夜はミカねえの家に泊まるから安心して。ええ、パパによるしくね。」

「そ、そのケータイ……。」

倉持ユタカが何か言おうとするが、ろれつが回らない。「——〇番だ！」

「ぼくら監禁されてるって！」

宮村トシキとぼくがさげんだ。

だが、一条ユカは気のなさそうな顔で、首を横にふつた。

「いやあよ。わたしこが気に入ったんだもん。あのおじいさんも何だかおもしろそうだし。」

おねえちゃんが身をのりだした。

「ね、ね、そのケータイって、A社の新作じゃない？」

「あらあ、わかりますかあ。先月、買ったんですよ。」

「うらやましー、かわいー。」

「色がいいでしょ。スリムだし……」

「写メしてよ、ね！」

おねえちゃんが、はしゃいでいる。「写メ」って、おねえ

ちゃんにはケータイを持ってないだろう。

女の子たちはベッドのある部屋を見つけて、入ってしま

った。

男たちは、ふたたびボーゼンと立ちつくした。

ユタカとトシキ

ぼくは眠っている。

ほおに当たる木の感触が冷たくて気持ちいい。

どのくらいいたったのか、なにやら耳を引っぱられる感

じがする。

引っぱられる感覚は、だんだん強くなってくる。もつ

と強く、さらに強く。

「いだだだだだっ！」

「目が覚めたかケンジ！」

頭の上に、黒髪のショートカットの女の子が見える。

おねえちゃんだ。ぼくは床に寝っころがって、耳を引っ

ぱられているのだ。

「さ、覚めた覚めました。」

「よろしい。あたしの方はさあ、お姫さまのユカちゃん

がスースーと寝ちゃってるのよ。つまんないから遊びに

きたら、あんたたちも寝てるのね。」

「えっ？」

おどろいて、ぼくはまわりを見た。

ぼくと倉持ユタカ、宮村トシキの三人は、男だけで別

の部屋で休んでいたのだが、ぼく以外のふたりは、ベッ

ドの上で熟睡している。

ぼくも異様に眠い。イスから床にくずれ落ちたのを思

い出した。だから床で寝てたのだ。これはおかしい。異

常だ。

窓の外を見ると、もう、とつぷりと日が暮れている。

渋谷の夜景が木と木のあいだに見えた。

「何時間たったんだろう。どうも、さっきのお茶に睡眠

薬か何か入っていたのかもしれない。異常に眠いもの。」

「ふえー、セコいじーさんめ、あたしのカラダが目当て

だったのかな？」

「それは絶対ないと思うけど……、おねえちゃん、何で

平気なの？」

「へ？」

「ほら、みんなでお茶を飲んだじゃないか。何でおねえ

ちゃんだけ眠くならず、飛びはねてんのさ。」

おねえちゃんは、ピンピンしている。これはおかしい。

異常だ。

昼間より元気いっぱいという感じで、おねえちゃんは

天井を見上げた。

「あたしは普通じゃないもの。このペンダントに守られ

てるんだよ。きつとそう。」

カウストウバに光を当てて、おねえちゃんはニツカリ

と笑った。宝石のきらきらした光を、ちよつときれいな

横顔にあびたおねえちゃんは、神ごうしい御すがただっ

た。

だがぼくは、違うことを考えていた。普段からおねえ

ちゃんは夜遊びばかりしている。夜になると目がらんら

んと輝きだすのだ。そういう意味で確におねえちゃん

は普通じゃない。睡眠薬より夜遊びぐせが勝つたのだ。

それはともかく、ぼくらはこれからどうするか話し合

った。

「交番に駆けこむべきだよ。ぼくらだけなら、＼ちから

＼を使って外へ出られるもの。子どもが三人、監禁され

てますって言えば、警察ものりだよ。」

「どうも、警察はきらいなんだよね。」

おねえちゃんは、しづーい顔をした。

わからなくもない。ケバい顔に今日以上の超うす着で、

夜な夜な盛り場をうろついている、おねえちゃんは、どち

らかかという、毎日警官から逃げ回ってる方だろう。

「それより、もうちよつと、あのじーさんの様子をさぐ

ろうよ。なんか、まだまだ秘密がありそうじゃない？」

「うーん。ぼくもあの高射砲はなんなのか、知りたいな

あ。突然、音楽が鳴りだしたり、玄関の鍵がひとりでに

かかったり、屋敷にカラクリが多いってのも不思議だ……。」

「そうよ、それぞれ。キョーミあるでしょ。」

「でも、このふたりは家に帰さない……。」

ぼくは、寝こんでる倉持ユタカと宮村トシキを見た。

「しようがないわね。ケンジ。そいつをおぶって。」

「えっ、ぼくが？」

「あたりまえでしょ。」

ぼくは寝こんでる倉持ユタカの下に、からだをもぐら

せた。

「お、重い……。」

「ほらあ、おぶったら、あたしにつかまって。」

「でも、住所がわからないよ。豪徳寺の方らしいけど。」

「なんとかなるでしょ。」

ぼくが左手をおねえちゃんの腰に巻きつけた時、ぼく

の口から、マントラ（真言）が流れた。ぼくの意志とは

あまり関係がない。

「オー……ン……、ハレー・クリシュナ・スタパティ

ア・ハレー……。」

カウストウバがぼうつと緑色に光り、おねえちゃんの

目の色が変わるのがわかった。

「シツデイ・マハー・シツデイ！」

周りの空間が、マール模様にくぐりと曲がった。

次の瞬間、夜風の中、ぼくらはコンクリの電信柱の上に

立っていた。

「きやーつ、落ちるうー！」「落ちついて！」

また空間が曲がって流れ、次の瞬間には送電線の鉄塔

の上に立っていた。

「高すぎるよ！」

次の瞬間は、ビルの屋上。

次の瞬間は、体育館の屋根。

こうして何度か空間のジャンプを繰り返して、気がつく

とぼくらは、団地のベランダに立っていた。

壁のあちこちにヒビが入っている。そうとう古い、ボ

ロい団地だった。手すりから下をのぞくと五階ぐらいの

高さだ。この古さではエレベーターもないだろう。狭く

て不便な住まいといつていい。

窓のむこうの室内に灯がともり、中から声が聞こえた。

「ただいまあ、お総菜買ってきたわよ。」

「帰ったか。おれも今、起きたところだ。」

倉持ユタカの両親だ。おねえちゃんは、カーテンのす

きまから中をのぞいた。

「これから夜勤だったわねえ。パン工場なんて、あんたに勤まるの？」

「徹夜は得意なんだが……。」

父親らしい、ほおのこけた人が苦笑いした。

「こんな仕事しかないからな。落ちぶれたくはないもんだ。春までのIT長者がアルバイト生活だ。」

「六本木のマンションが懐かしいわねえ。でも、見晴らしはこの団地もまあまあよ。」

母親らしい、さげけた感じの人が窓に近づいてきた。

ぼくたちはあわててベランダのすみにかくれる。

「おそくなつたが食事にしよう。この総菜は、また……。」

「パート先の残り物。すごく安いよ。そういえば、ユタカは？　ちゃんとご飯食べたのかしら。」

「さあ、おれは寝てたからなあ。あいつはしつかりしてるから、冷蔵庫をあさって何か食ったんじゃないか。」

何も食べてない。ユタカはぼくの背中中、くたーっとしている。しよいい直しながら、ぼくはまた部屋の中をのぞきこんだ。

「寝てるの？」

母親がとなりの部屋を指さした。

「たぶんな。」

父親は総菜にはしをつけはじめた。

おねえちゃんが、となりの部屋の窓をあけた。カギはかかっておらず、音もなくサッシが開いた。おねえちゃんもぼくも無言で、ユタカをかかえてベッドに寝かせた。

おねえちゃんは、ユタカの黒ぶちのメガネをやさしくはずして、そばのつくえの上に置いた。

そして、ぼくがおねえちゃんの腰につかまると、またマントラが口からでて、ぼくらは外へ飛び出した。

空間を移動し、巨大な寺院の屋根に出た。おそらく豪徳寺だろう。まねき猫で有名だ。

おねえちゃんは何もいわない。また空間が移動し、来た時とは逆の道をたどって、もとの池尻の洋館の二階にもどった。

「つぎつ、そいつ。」

なんだか、怒ったような顔をして、おねえちゃんは命令した。

ぼくは宮村トシキのからだを背中にかかえた。ユタカほど重くはない。

また空間がマール模様に変わり、ぼくたちは羽根木の方向へジャンプを繰り返した。羽根木はでっかい公園があるところだ。

小田急線らしき鉄道が見えたあと、次のジャンプで、小さな一戸建ての前に、ぼくらはあらわれた。

「ごちゃごちゃした住宅地にはさまれた、それは小さな一戸建てだ。敷地のすみに、子ども用のバスケットのゴールがあるが、古くなってこわれてる。」

表札を見ると、『宮村』と書いてあった。

「ここだよ。」

おねえちゃんはチャイムを鳴らしてみた。

だけど家の人が出てきたら、この状況をどう説明したらいいだろう。「池尻からつれて参りました」っていうのだろうか。

しかし、誰も出なかった。家の中はしんとして、静まりかえっている。

「みんな寝てるのかな。明かりひとつついてない。」

ぼくが首をかき上げてみると、おねえちゃんがドアのノブをまわした。

「だめだ。カギがかかっている。」

「そりや、かかっているさ。」

「ちよつと、そいつの腰をこつちへ近づけて。」

何のことやらわからないが、ぼくは言うとおりにした。するとおねえちゃんは、トシキの腰についてるベルトキーを伸ばして、カギを鍵穴に差しこんだ。

かちやりと音がして、ドアが開いた。

「お、おねえちゃん、このまま入るつもり？」

「他にどうすんのよ。誰も出てこないなら仕方ないじゃない。」

おねえちゃんは、ずかずか入っていく。しょうがないので、ぼくは後に続いた。

それにしても何か変だ。子どもがひとり帰らないのなら、家の人は心配して起きてるものだろう。この家には人がいる気配がなかった。

カウストウバがぼうつと緑色に光った。おねえちゃんは、それを手に持ち、ろうかを照らした。罰当たりな感想だが、こういうとき懐中電灯代わりになる便利な宝石だ。

いた。

「これを見て。」

一枚の紙切れを、おねえちゃんは差し出した。置き手紙みたいだ。

『トシキへ——。約束通り、私たちは先に荷物を持って出発する。連絡先は、岩手県K町、字××××……。』

そのあと、電話番号などが書いてあって、『留守中のことは、代田のおばさんに頼んである。お金は大事に使うこと。十日でもどるので、おまえも出発の準備をしておくこと。』

よく見ると、部屋はソファールとテレビひとつ以外は、がらんとして何も無い。台所の方を見ると、こちらは真正銘からっぽだった。

事情はわからないが、宮村トシキは東京から引越すらしい。それもかなりあわただしい引越だ。子どもをのこして、先に行くなんて、ありだろうか？

トシキは、ソファールの上でクークーと眠っている。朝になったら、この手紙を読むのだ。

「帰るよ！」

おねえちゃんは、何だかすごく不機嫌になって、ぼくの手を引っぱった。部屋がマール模様にくぐりと曲がり、ぼくらは池尻の洋館ではなく、自分たちの家の方向へジャンプを続けた。

おねえちゃんはずつと無言だ。おねえちゃんの心の中はわからない。ふたりのことをどう思ったのだろう。

戦争ごっこ

おねえちゃんとぼくは洋館にもどった。一度、家に帰ってアライバイを作り——というより、お母さんに、こつびどく怒られて——、寝たふりをしてから、池尻の洋館にもどったのだ。

ぼくが置き手紙を書いてきたから、お母さんたちは朝早く、ぼくらふたりが出かけたと思うだろう。

その朝になった。突然、起床ラッパが鳴りはじめた。

「起きろー、起きろー、みな起きろー、起きないと隊長さんにしかられるー……」

ぼくの頭に歌詞がよみがえった。よみがえったって、どこで覚えたんだ、ぼくは。とにかく、ぼくはベッドから転げ落ちて、階段を一階のホールへと駆け下りた。そこでは『少尉どの』が腕を組んで、無言で立っていた。

少尉は、今にも爆発しそうなこわい顔をして、はりつめた空気をただよわせている。

パジャマでたちつくす、ぼくの後ろから、おねえちゃん一条ユカが、ぺちやくちやおしゃべりしながら下りてきた。

「朝っぱらからうるさいわねえ。」

「おねえさま。私、こんな時間に起きたことありませんわ。」

おねえちゃんはいだいたんに、一条ユカはかわいらしく、あくびをしている。

『少尉どの』のこめかみが、ピクピクと動いている。我慢が限界に達しようとしているのだろうか。

だが、少尉は押し殺した声で、ぼくにこう聞いた。

「残りのふたりはどうした。」

老人とは思えない、突き刺すような目でぼくをにらんでいる。

「ええと、その、夜のうちに帰っちゃいました。」

少尉どのは、ムキーツという、音にならない声を上げて爆発した。

「脱走か！ やはりきの夜の夜、点呼をとるべきだった！ おのれ、あのふたり銃殺だ！」

老人の大音声がホールにこだまする。

「これからどうしましょう。おねえさま。」

「だいじょうぶよ、ユカちゃん。お泊まりセットをふたつ持つてきてあるから。」

「わあ、ありがとう。少尉さん、この家にオープンがありますか？」

いきなりふられた少尉の怒りは、肩すかしをくった。「ああと……、オープントースターならあるが……。」

「それじゃ、フレンチトーストを焼きますね。」

「すっごい、ユカちゃん！」

残されてしまった。がつくりと肩を落とす少尉どのは、イスにくずれ落ちた。

料理ができあがり、女の子ふたりとの朝食の席ははなやかだった。

「ねえ、おねえさま。今年ももう、海へ行きましたか？」

「それがまだなのよ。水着は買ったんだけどね。こーんなの。」

「わあ、ビキニですかあ、似合いそう。」

たしかに、おねえちゃんは、ひらひらのついたビキニを買った。

「でも、このへんじゃ着られないよね。」

「そうですね。わたしも、ワンピースを買ったのですけれど、屋内プールでは、ちよつと……。」

ぼくにはわからなかった。

「どうして屋内プールじゃだめなのさ。——ええと、一条さん？」

一条ユカの顔が、パアアツと明るくなって、こつちをむいた。

「ユカつて、よんで！」

美少女は、両手をあわせて、アツプになった。

「は、はい、ユカ……ちゃん。」

ぼくは勢いのみこまれてしまった。

おねえちゃんが、にやにやしながら、説明してくれた。

「屋内プールだと、スポーツタイプの水着じゃないと、なんだか恥ずかしいの。リゾート気分じゃないなあつてね。」

「だからといって、スクール水着はいやですものねえ。」

「そ、そうね……。」

おねえちゃんの笑顔がひきつった。去年、水着が買えなくて、スクール水着で通したのだ。あれは屈辱の記憶らしい。

「プールなら、この家にもあるぞ。」

エスプレッソコーヒーを飲んでいた少尉どのが、ぼつりとつぶやいた。

女の子ふたりにはさまれて、少尉どのは悪い気はしないみただった。

「うむむ。朝食がすんだら、掃除してみよう。」

「ばんざーい。」

おねえちゃんが両手をあげた。このあと、このことばを何度もさげばされることになるとは、ぼくらはまったく気がついていなかった。

朝食の食器は、ぼくがかたづけした。そのあいだに、おねえちゃんたちは、庭のプールを見てきた。

もどつてくるなり、おねえちゃんは、コーンした声でぼくにしゃべった。

「すっごいよ。ケンジ！ 十メートル以上あるプールなの！ ビバリーヒルズみたい。扇形をしていて、ちよつと汚れているけど、そうじをすると大丈夫だって、少尉がいつた。がんばるのよ！」

「はっ？ 何をがんばるのさ。」

「あんたがそうじするのよ！」

おねえちゃんは、両手のこぶしに力をいれた。いつの間にか、そんなことになってるらしい。

十分後、ぼくは少尉どのとプールの床をみがいていた。ブラシでゴシゴシとこすつて、よ、これを落とすのだ。あつという間に汗だくだ。へつぴり腰のぼくに、少尉のおしかりが飛ぶ。

「なんじゃ、その腰つきは！ 日本人ならへそに力をいれんか！」

「はあ。」

「わしの言うとおり、復唱しながら、からだを動かすのだ。」

「はい。」

「ぼくらの！」

「ぼくらの！」

「お国は！」

「お国は！」

「金おう」

「金おう」

「無欠の」

「たぐいなき」

「輝く」

「輝く」

「国がら」

「国がら」

なんのかけ声か知らないが、ゼーゼーわめきながら、ぼくはブラシを動かした。

それをふたりの男子が、まん丸の目をして見つめていた。倉持ユタカと宮村トシキだった。

「うぬう、キサマら！」

少尉どのが、脱走兵ふたりを見て血相を変えた。なんだった、あのふたりは戻ってきたんだ。大変なことになるかもしれない。

老人が怒りに燃えているのを察知したのか、倉持ユタカは直立不動でサツと敬礼した。

「豪徳寺小五年、倉持ユタカ！ ただいま帰還いたしました！」

「うっ。」

少尉の気がそがれた。とっさにトシキもまねをする。「羽根木小五年、宮村トシキ！ ただいま帰還いたしました！」

ふたりともしゃつちこぼって、必死でくそまじめな顔をしている。ここで老人を怒らせたなら、何をされるかわからない。

少尉の顔がふっと、ゆるんだ。

「ま、まあよいわ、ブラシを持って、プール清掃をせよ！」

「はいっ！」

ふたりはプールへ降りてきて、ブラシを持った。

掃除の続きがはじまった。少尉どのは、ぼくらにさっきのかけ声をさげばせて、自分は合いの手を入れた。

「ぼくらの」

「いやさかホイ！」

「お国は」

「いやさかホイ！」

「金おう」

「いやさかホイ！」

「無欠の」

「いやさかホイ！」

トシキもユタカも笑いを必死でこらえている。もし笑ったら、ぶんなぐられるだろう。

それにしてもタフな老人だ。ほおとあごに白ひげをたくわえているから、ぼくらより暑いはずなのに、背すじをしゃんと伸ばして、ブラシを動かしている。

「まもれよ」

「いやさかホイ！」

「のばせよ」

「いやさかホイ！」

「一億」

「いやさかホイ！」

「一心」

「いやさかホイ！」

みんなふらふらになってきたころ、プールみがきは終了した。

「キサマら全員あがれ。これから水をいれる。」

老人の声で、三人ともへたりこんだ。みんな息があら

い。「なんでもどつてきたんだよ。」

ぼくが小声でできくと、ふたりとも、わけがわからないといった顔で首をふった。

「おれ、ウチに帰った記憶がないんだ。気がついたら自分で寝てた。だから気になってなあ。」

倉持ユタカのメガネは汗まみれだ。

「おれもだ。わけわかんないよ。一条ユカはどこ？」

ハンサムな顔を汗だくにして、宮村トシキはいった。

「彼女なら、ぼくのおねえちゃんと一緒に、水着を買いに行ったよ。」

「水着！」

ふたりは声をあわせた。男の子なら当然だ。

しばし無言で、みんな何かを考え続けていた。静寂が破られたのは、老人のどなり声だった。

「何をしとる！ 水を流すから、さつさとあがらんか！」

ぼくらはびつくりして飛びあがり、プールサイドに上がった。

「海ゆかば」斉唱！

少尉どのがさげんだので、ぼくらはぎよつとした。プールサイドに直立させられ、みんな歌詞を覚えさせられた。軍事オタクの倉持ユタカは、この歌を知っていたらしく、彼にあわせて、ぼくは声をはりあげた。

「おーおーおきーみーのー、へーにーこそー死なーめー……」

プールにどうどうと水が流れこんでいく。最後にバンザイを三唱させられた。

八絃一宇

少尉どのが早々に室内に引き上げたので、ぼくら五人は、貸し切りのプールで思う存分楽しんだ。

「ユカちゃん、どーだ！」

「ぎゃあ、おねえさま、冷たい！」

女の子の黄色い声に、ぼくがぼうつとしてしていると、水中から突然、足をひっぱられた。

「ぶわっ、げーっ」

「あははは。びっくりした？」

「げほ、げほっ、トシキは泳ぐのうまいなあ。」

「ケンジはクローリングできなそう。」

「うっ。」

痛いところをつかれた。

「あれっ、倉持君は？」

「あいつなら、ずっともぐってるよ。意外にも、もぐりの名人だぜ。」

「へえ。」

うわさをすれば、ぼくの目の前に、ざーっと水をしたたらせて、男が立ち上がってきた。

「き、君だれ？」

「倉持ユタカだよ。」

「倉持君、顔が全然ちがうじゃないか。」

メガネをとった彼の目は点てんのように小さかった。

「ほつとけ！」

気を悪くしたのだろうか、どぶんと水中へ消えてしまった。

「おーい、男の子たち、また競争しようよ。」

「ハイ！ チャコさん。よろこんで！」

トシキは喜々として、女の子ふたりの間に入っていき、みんな泳いだり歩いたり、もぐったり、それはそれは、楽しい時間だった。

つかれたら、今度はこうらぼしだ。プールサイドに寝

つ転がって、さんさんと日光をあびる。

「おねえさま、日焼け止め塗ってあげますわ。」

「おたがいに塗りっこしましょ。」

男3人は、見るともなく女の子に目がいつてしまう。

おねえちゃん、見るの面白くないわ。おねえちゃん、ユカちゃんはピンクのワンピースを着ている。美少女ユカちゃんは妖精のようだし、認めるのもなんだが、おねえちゃんもスタイルはいい。

水着がわりのトランク스가乾くまで、ぼくら三人は、ドキドキしながらふたりを見ていた。

「ここは穴場だよ。毎日でも来たいよね。」

おねえちゃんが、ミックスジュースを飲みながらいった。

心地よいつかれを感じながら、ぼくらは居間でくつろいでいた。少尉どのによると、小休止のあとで、勉強させるのだそう。なんの勉強か知らないが、ぼくらは、まあいいやという気分になっていた。

やがて少尉どのがやってきた。あいかわらず暑苦しいかつこうをして、手には細長い棒をもっている。

「挨拶はどうした？」

じろりと少尉どののは、こちらをにらんだ。それはいかにも教師みただったので、倉持君がとっさにさげんた。

「き、起立！」

全員あわてて立ち上がる。

「礼！ 着席！」

座ろうとして、みんなこまった。どっちを向いて座ればいいのだろう。

その時、部屋に黒板があるのに、ぼくは気がついた。伝言板か何かだと思っていたのだが、これは黒板なんだ。ふつう、黒板というのは緑色なものだが、この黒板は文字通り、本当に真っ黒だった。

少尉どのがその前に立ち、木の棒でビシリと黒板をたたいた。ぼくはビクツとした。

「座れ！」

押し殺した声で老人がいった。ぼくらはそちらを向いて着席した。

「本日はおまえたちに、『ハッコウイチウ』の精神について教える。」

「ハッコウイチウ？」

みんな首をひねった。老人はうなずいて、黒板にチョークで文字を書きはじめた。

八絃一字

なかなか立派な字だ。だが、意味はさっぱりわからない。

「おまえたち。この国はどうしてできたか知っておるか。」

「ええと……。」

倉持君が答えた。

「一万数千年前に縄文人が移住してきて、三千年前ぐらゐから、弥生人が住み着いたんだ。小さい国がほうぼうにできたあと、一番大きな国に統合された。それが古墳時代だったと思うけど、そのころのことは、文献がなくよくわからないんだよな。」

「うむ。おまえがいうのも、一つの見解じゃ。だが、魂が欠けておる。」

「魂？」

「日本人の日本人たる心じゃ、われわれがなぜ日本人であるかという、おそれおおくも……。」

ここで宮村トシキが、あくびをおさえた。老人は木の棒でトシキのほつぺたを音が出るくらいひっぱたいた。

「なにすんだよ！」

トシキの目から涙が出ている。そのくらい痛いんだらう。

「よいか。『おそれおおくも』といったら、背すじをのばしてかしまれ。そのあとにわしがいうのは、神のごとき御方のお名前である。」

（神のごとき……？）

なんかぼくは、わかったような気がする。

「おそれおおくも……。」

老人がいうと、全員背すじをのばして緊張した。

「天皇陛下がいらつしやればこそその日本人なのじゃ。」

場が静まりかえった。

老人は小さな冊子を配りだした。ぼろぼろでそうとう古いものだ。開いてみると、古代人みたいな神さまの絵とこんな文章が書いてある。

——遠い大昔のこと、イザナギのみこと、イザナミのみことという、お二方の神さまがいらつしやいました。

この神さまが、橋の上から海の水をかきまわすと、一つの島ができたのだそう。島は大きくたくさんの島となり、それがこの国になったというらしい。

（これって、国生み神話というのじゃなかったかな。古事記だか日本書紀か何か……。）

思い出せないが、そんなところだろう。

読み進むと、神さまの一人、アマテラスが、ニニギのみことにこんなことをいう。

——「日本の国は、わが子わが孫、その子その孫の、次々にお治めになる国であります。みことよ、行ってお治めなさい。」

アマテラスはニニギのみことに、鏡と勾玉と剣、つまり三種の神器をわたすのだ。

やがて、『日本は神の国』という文章があった。

——天照大神の仰せによって、神のお血すじをおうけになった天皇が、日本をお治めになります。臣民は、祖先のころざしをうけついで、ひたすら、天皇の大みわざをおたすけ申しあげてまいりました。

ふうん。天皇は神の血すじをうけている、ということになっているのか。ぼくは皇居の広い森を思い出した。

「さて、みなは、最初の天皇陛下の名を知っておるか？」

少尉どのが聞くと、倉持君がおすおすおと答えた。

「神武天皇……だと思っけど、最初の二十人かそこらは、架空の存在なんじゃあ……。」

「これは魂の問題なのだ。」

老人は語る。

「神武天皇はわが国を平定した偉大な天皇である。その御方が即位なされるときに、『はっこうをおおいて、いへとせんこと、またよからざらんや』との詔勅をくだされた。

よいか。はっこう、あめのしたとも読むが、これは世界という意味だ。世界を一つの家のようにして、平和な国を作るといふことなのじゃ。

これぞ、偉大な天皇の大御心である。なんと素晴らし

いことか。われら臣民は、天皇陛下の御為に心血をそいでこの大御心を実現せねばならぬのである。

それが八紘一宇の精神じゃ。神の国の臣民たる日本人は、したがわぬものを平らげ、世界を神の家とするのだ。」

少尉どのは大まじめに語った。ぼくは思うのだけど、これでは悪の秘密結社の世界征服計画みたいではないか。みんな同じ思いだったらしい。なんだか重苦しい空気があった。それを破ったのは、おねえちゃんだ。

「おー、かつこいいい！ ようするに世界征服するのね。」
おねえちゃんが、身もふたもない言い方ではしやぎ、少尉どのは苦い顔をした。

「あたし、そういうの好きなのよ。お色気のコスチューム着て、手下にいうの。『やっておしまい！』」

ゴホン、ゴホン、ゴホンと老人がセキをした。

「それはちがう。そういうのではない。八紘一宇とは、大東亜に平和を建設するという、大きな善なる心なのだ。」

「大東亜ってなんですか？」

ユカちゃんが、のんびりといった。

「ふむ。ちよつと待っておれ。」

老人が席をはずしたスキに、みんなでひそひそ話になった。

「あのじーさん、完全にいかれてるぜ、おお、いてえ！」
さつき殴られたところをさすりながら、トシキがいった。

「いや、あれは太平洋戦争中の教育なんだ。」

倉持君が博識なところを見せた。

「なんか、日本中がイカレてたらしい。本気で世界制覇しようとしたのだとか、テレビでやってた。」

うーん、と、みんな腕組みをしてしまった。

ぼくらの大東亜

ぼくは、おねえちゃんにささやいた。

「なんか、雲行きがあやしいよ。やっぱり逃げたほうがいいんじゃない？」

「あんな、忘れたの？ 世田谷公園で何かが発発する、

スベクタクル映像を見たのを。」

「あ……。」

すっかり忘れていた。

「あの、じーさんは、何かとんでもないことを、たくらんでいるのかもしれないよ。あの大砲はなんなのか、何をやるつもりなのか。もしも大勢の人が危険に巻き込まれるようなことだったら、あたしたちは絶対にそれを阻止しなきゃならない。」

おねえちゃんは力説した。まったくの正論だ。おねえちゃんごときに、こんなまともなことを言われたのは、生まれてはじめてかもしれない。

「だから、あたしたちは、明日もあさっても、この洋館に來なくてはならないの。あんな、毎日プールのそうじをするのよ。」

すぐくびしい顔をして、おねえちゃんは水着の入った手さげを、ぼんぼんとたいた。ひよつとして、おねえちゃんはプールに來たいだけなのでは……。

ぼくが疑念を口にする前に、少尉どのが何かをかかえてもどってきた。みんなはまた緊張した。

老人はテーブルの上に大きな紙を広げた。それは一枚の地図だった。

「これが大東亜である。」

描かれているのはアジアだった。北のほうに日本と朝鮮半島と中国がある。南はオーストラリア、西はインドの一部まで入っている。

「よいか、これらのほとんどの国は、欧米列強の植民地なのだ。それを日本国が平定して、平和を取り戻してやるというのが、八紘一宇の精神である。」

少尉どのは、わかったか、という顔をして、みんなを見まわした。

「でも、それって昔の話だと思っけど……。今はみんな独立国になつてるんですよ。学校でならつたよ。」

ちよつとふてくされた顔をして、トシキがいった。

「はたしてそうかな？」

老人はギロリと彼をにらんだ。

「これらの国は、ほとんどある国の支配下にあると思わんか？」

「米国……。」

倉持君が黒ぶちのメガネをあげた。

「その通りじゃ。これらの国は、米国の支配下にあるか、

共産主義なんぞという妄想にとりつかれた危険な国か、どつちかなのじゃ。じゃからこそ、八紘一宇の精神は重要なのだ。ふたたび日本が世界に覇をとる時、おそれおおくも……。」

全員が、ビツと背すじをのぼした。

「天皇陛下の御ために、われら臣民は命をかけて働かねばならぬ。そのため、おまえたちは、よく勉強し、からだをきたえ、八紘一宇の精神を身につけねばならない。そのため、夏季鍛錬期間なのである。」

「夏季鍛錬期間？ 夏休みじゃないの？」

おねえちゃんが、まぬけなことをいった。この老人の頭の中はちがう。

「たわけ！ 休みなぞで立派な少国民になれるか！」

少尉どのは怒号で、みんな首をちぢめた。

「では、おまえ。月波といったな。」

「チャコでいいよ。」

「赤えんぴつで日本の領土を塗ってみろ。」

「なによそれー、馬鹿にしないでよ。」

おねえちゃんは、地図にある日本列島をチャツチャと赤く塗っていった。

「チャコさん。北方領土を忘れてる。」

ロシアから文句でも来そうなことを、トシキがいった。

日本列島を赤く塗りあげたあと、おねえちゃんは、どうだという顔をした。

「ふん。」

老人は、おねえちゃんから赤えんぴつをとりあげ、朝鮮半島を真っ赤に塗りつぶした。さらにカラフトの半分と千島列島、台湾まで塗りつぶし、最後に中国の東北地方に赤い斜線を引いた。

おおーと、声を上げたのは倉持君だ。

「そうか。これが戦前の日本か。ここが満州国だ。」

さすがに詳しい。

「明治維新の後、日清・日露の戦争に勝った日本は、朝鮮半島を自国のものでしたんだ。台湾だって日本の領土だったんだぜ。」

さらに大陸に進出した日本は満州国を建国した。没落していた清朝のラストエンペラーを皇帝にし、日本の兄弟国としてでつかい国を作ったんだ。」

倉持君はコーフンしている。このあたりの歴史が好きなんだろう。少尉どのは大きくうなずいた。

「これからわが国が、いかに八紘一宇の精神を世界に広めてきたかを説明する。よいか。これからいう場所に、これをはりつけるのだ。」

少尉どのが、シールのように小さな紙を持ち出した。日の丸とか、爆弾とか、沈没する軍艦の絵などが描いてある。

「昭和十二年七月七日。盧溝橋。」

「へっ？ ロコウキョウ？」

おねえちゃんが、すっとんきょうな声を出した。

「北京の西南だ。」

少尉がいうと、倉持君がその場所に日の丸をはった。

「そうか。ここが日中戦争のはじまりか。」

「わかったか。ここから皇軍は、支那との全面戦争に入ったのだ。」

「シナ？」

ユカちゃんが小首をかしげた。

「中国のこと。チャイナの語源になったことばだよ。」

ぼくが説明すると、ユカちゃんが両手をたたいた。

「うちの近くにシナそばの店があるわ。おいしいの。」

「それって、中華そばと同じってことか。そういうえば、メンマのことをシナチクっていうよな。」

トシキの指摘に、おーという声が起こった。

「うーん。シナそばと中華そばとラーメンは同じものだったのかあ。」

なっとくしたように、彼は腕を組んだ。

「おれはまた、なるとが入ってるのが中華そばだと思っただけだな。」

倉持君がいったので、みんなで笑った。

「えへん、えへん！」

少尉どのがわざとらしくセキをした。ぼくらはあわてて緊張した。

「戦線はたちまち拡大した。七月二十八日、皇軍は北京、天津に総攻撃をかける。ほれ、ほれ。」

銃剣が交わった。戦闘中。のシールを、中国北部にぼくははった。

八月九日、上海で、海軍中尉がひきょうなシナ人に射殺され、戦闘になる。その日のうちに、日本軍航空隊は、漢口、蘇州、南京を爆撃する。」

「やけに手まわしいいな。」

倉持君は、揚子江ぞいに爆弾マークのシールをはった。

「昭和十二年十月、安慶上空で空中戦。」

揚子江沿いに戦闘中シール。

「昭和十二年十一月五日、皇軍は苦戦の末、上海戦線突破。」

上海付近に、戦闘中シールがはられた。

「昭和十二年十二月二日、南京上空で六機対三十四機の大空中戦。勝ったのだぞ。」

南京に戦闘シール。

「昭和十二年十二月十日南京攻略。同十三日ついに南京占領。」

倉持君が南京に日の丸のシールをはった。

「敵の本拠地を占領したのだ。ほれ、バンザイ三唱せんか。」

「え？」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

ぼくらはバンザイ三唱させられた。

「ところが敵はひきょうにも、漢口に逃げたあとだった。」

揚子江の上流の方をぼくは見た。

「そんなひきょう者と話し合う余地などない。昭和十三年一月、日本政府はシナの政府は相手にしないと声明を出した。」

ぼくらは顔を見あわせた。

「昭和十三年四月から徐州作戦がはじまった。北と南から敵をはさみうちだ。」

「あ、知ってる。三国志の徐州だろ。」

トシキが徐州をさがした。揚子江と黄河のあいだぐらにある。

「五月二十日徐州占領。」

倉持君が徐州に日の丸をはった。

「ところが敵はまたしても漢口に逃げた。なんとというひきょう者。」

老人は、心底がっかりしたような顔をした。

「昭和十三年十月二十七日、皇軍は広東、武昌、そしてついに漢口を占領した。」

広東は香港のそばだ。思いっきり南に日の丸がはられた。それから漢口とそのとなりの武昌に、ぼくが日の丸をはった。

「ついに敵の本拠地を占領したのだ。ほれ、バンザイ三唱。」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

「バンザイ！」

けになってしまった。

「何をいう。本当は二百回爆撃したのだぞ。」

少尉どのがにらむと、倉持君はうんざりした顔をした。

「みなもいかげん疲れてきたかもしれんな。」

全員、うんうんとうなずいた。

「次で最後にしよう。昭和十六年十二月八日、対米英戦開始。真珠湾攻撃、戦艦五隻撃沈三隻大破。」

おおっという声があがり、倉持君がはるか東、ハワイに爆弾マークと撃沈マークをはった。

「大戦果じゃ、ほれ。」

「バンザーイ！ バンザーイ！ バンザーイ！」

ぼくらは心からバンザイ三唱した。

「今日はこれくらいにしよう。続きはまた明日。」

「はあい。」

やっとな終わった。

八日は特別な日

ぼくらはあらためて、この洋館のことを秘密にしておくことを誓わされ、外へ放免されることになった。

一条ユカなど家へもどることをしづつたが、ぼくの必死の説得で、成城の自宅に帰っていった。宮村トシキは羽根木へ、倉持ユタカは豪徳寺へ、それぞれ電車で帰った。

おねえちゃんとぼくは、すこし洋館に残った。少尉という老人が、何をたくらんでいるか、さぐりたかったからだ。

帰るふりをして一度そとへ出たあと、洋館のそばの植え込みに姿をかくし、ぼくらはこっそりと中をのぞいた。

窓のむこうに老人が見える。壁にむかっているのか、こちらから表情はわからない。老人は洋だんすに手をかけ、ゆつくりととびらを開けた。

そこには何か写真のようなものがあつた。誰かの写真なのだが、よく見えない。老人はぶつぶつとつぶやいているのだが、残念ながら、何をいつてるのかさっぱりわからなかった。

「うーん、くやしいなあ。声が聞ければねえ。」

おねえちゃんが、さも残念そうにいったとき、ぼくの口からマントラが流れた。

「オー……ン……：……：タット・トゥヴァム・アシ・ハレー・ヴァイシユラーヴァナ（多聞天）！」

おねえちゃんの胸のペンダントが緑色に光り、そこから老人の声が流れた。

「聞こえる！」

「シツ」

「ふっふっふ、都合のいい子どもたちが来たわい」

「ぼくとおねえちゃんは顔を見あわせた。」

「今こそ使命を果たす時がきたのだ。見ておれよ……」

老人は、少尉はそれつきり黙りこんでしまった。

おねえちゃんとぼくは、しかたなく門の外へ出た。駅への道を歩きながら、さっきの老人のひとりごとは、いつたいたいのことなのか、ぼくらは話しあつた。

「都合のいい子どもだつて。」

「使命を果たすともいつてたね。」

「続けて考えろと。」

おねえちゃんが、ひたいをつついた。めずらしく頭を使っている。

「あたしたちを利用して使命を果たすつてことじゃない？」

「わからないのは、その使命だよ。何をしようつていうのかなあ。」

どう考えても情報不足だつた。わかりっこない。

おねえちゃんが腕を組んでうなづいた。口もとがにやついている。

「これはもう、明日もプールに行くしかないな。水色の水着の出番だな。」

きびしい顔をよそおっているが、うれしそうなのがバレバレだ。新しい水着のデビューなのだ。

よく日の朝、池尻の駅に、おねえちゃんとぼくは降り立つた。家から地下鉄で数駅なので、五人の中ではぼくらが一番近い。

門は開いていた。おねえちゃんはずんずんと奥へ入り、洋館の居間に踏みこんだ。

少尉はいない。たぶん、奥の部屋、あの高射砲の部屋

にいるのだろう。そちらの部屋はびったりとドアが閉まつており、ぼくは中を見るのはあきらめた。

おねえちゃんがぼくを手まねきした。洋だんすのとびらを開けたのだ。

おねえちゃんは黙つて中を指さす。そこにはセピア色の大きな写真があつた。

軍人の写真だつた。おそらく旧日本軍の将校だろう。

顔がどことなく少尉に似ている。

「ケンジ。これは若い頃のじーさんだよ。」

「やっぱりそう思う？」

「自分がえらい軍人だつたころを、写真を見て思い出していたんだよきつと。ナルシストめ。」

そうなんだらうか。ぼくは軍服にくわしくないの、階級とかよくわからない。この軍人が少尉だとすると、やっぱりあの老人なのだろう。

「こんにちは。」

ユカちゃんの声だ。ぼくはそつと洋だんすのとびらを閉めた。

「来たぞー。」

トシキの声だ。意外にも、ふたりは一緒に来たようだ。

「やあやあケンジくん。」

今日はサッカー少年つばいかつこうをしたトシキが、きげんよく手を振つた。

おねえちゃんとユカちゃんが話している間に、トシキはこつそりとぼくに耳うちした。

「おどろいた？ ユカちゃんのケータイ番号を聞いておいたんだ。電話で話して時間を合わせたのさ。」

「やるなあ。」

ぼくは素直に感心した。

「あんな女の子には、もう会えないかもしれないからなあ……」

誰にもとなく、トシキはぼつりといった。彼は一週間後には東京からいなくなる。

「みんな早いなあ。」

ふりかえると倉持君がいた。自分が最後なので驚いているようだ。彼には、あとでこつそりとあの写真を見てもらおう。

その時、音楽がはじまつた。天井のスピーカーから、最初は雑音だらけに、やがてはつきりと聞こえた。悲しげに何かが歩いているような曲だ。曲はどんどん大きく

なってくる。

「なんなの？」

おねえちゃんが顔をしかめた。曲は悲壯感を増し、それでも同じテンポで歩き続ける。どこまでもどこまでもそれは永遠に続くような。

「この曲は……。」

ぼくは思い出した。

「ベートーヴェン第七番第二楽章、『不滅のアレグレット』だ。」

「そうか。パパの好きな曲だね。」

ぼくはうなずいた。

曲はどこまでも歩き続ける。淡々とかたくなに、倒れそうになりながら、それでも倒れない。いつまでも歩き続ける。

ユカちゃんが不安な顔でスピーカーを見上げた。

トシキも倉持君も、これから何が起こるのか、こわじ

わと天井を見ていた。

「みな、集まったな。」

曲にのせて、スピーカーから老人の声がひびいた。

「今日は何の日か知っておるか。」

さらに老人は語る。みんな首をかしげた。

今日は八月八日だ。

「原爆の日だっけ？」

「そりや、六日と九日だ。」

トシキと倉持君が話している。

終戦記念日は八月十五日だし、八日が何の日かは誰も

知らなかった。

不滅のアレグレットは流れ続ける。くりかえしくりかえし。

「本日は大詔奉戴日である。」

老人の声があった。

「タイショウホウタイビ？ 包帯がなんなのよ。」

おねえちゃんがさげふと、スピーカーから返事があった。

「包帯ではない。宣戦の大詔をいただきましたまつた日

である。」

「はやい話が……。」

倉持君が小声でいった。

「天皇の、戦争に関する『みことのり』をありがたく

いただいたらしい。」

「天皇のおことばかあ。何をいったんだろ。」

トシキがつぶやいた。

「ねえ、これじゃないの？」

ユカちゃんが、テーブルの上のパンフレットを持ち上げた。例によってぼろぼろだ。

こんなことが書いてある。

——わが国は、さきに内鮮一体の実を挙げて、東洋平和の基を築き、今また、日滿不可分の堅陣を構えて、東亜のまもりを固めました。しかも、東洋永遠の平和を確立するには、日・滿・支三国の緊密な提携が、ぜひとも必要であります。わが国は支那にこの旨を告げて、しきりに協力をすすめました。ところが支那の政府はわが誠意を解せず、欧米の援助を頼みに排日を続け、盛んに軍備を整えて、日・滿両国にせまろうとしました。

「なんだか難しいなあ。『鮮』というのは朝鮮半島のことだろう。『滿』は満州国だな。今の中国東北部に日本がたてた国だ。『支』は支那のことか。支那そばのシナだ。」

倉持君が解説した。

「ようするに、日本は、みんなで仲よく協力しようといったのに、中国が欧米の援助を受けて、日本に刃向かってきたといたいわけだ。」

「ふーん。」

ぼくはとまどっていた。日本側から見れば、そうなる

んだらうけど。

「続きがあるぞ。」

——ところで、米・英の両国は重慶政府を助けて、支那事変を長引かせるばかりか、太平洋の武備を増強し、わが通商をさまたげて、あくまで、わが国を苦しめようとした。しかも、わが国はなるべく事をおだやかに解決しようと、昭和十六年の春から半年以上も、誠意をつくして、米國と交渉を続けましたが、米國は、かえってわが国をあなどり、独ソの開戦を有利と見たのか、仲間国々と連絡してしきりに戦備を整えました。こうして長い年月、東亜のためにつくして来たわが国の努力は、水の泡となるばかりか、日本自身の国土さえ危うくなつて来ました。

昭和十六年十二月八日、しのびにしのんで来たわが国は決然としてたちあがりました。

「そうか！ 真珠湾攻撃だ。パールハーバーだ。」

倉持君がさげふ、ぼくもわかった。

「あれは十二月八日だね。」

「なるほどなあ。日本がアメリカやイギリスと険悪になつたのは、それらの国が中国を支えて、日中戦争が終わらなくなったからなんだな。」

「ニュースでよくいう、泥沼化つてやつだね。」

「たしか、当時の日本は経済封鎖されてたらしいぞ。経済制裁をくらつてたわけだ。」

「うんうんと、ふたりで納得してたら、トシキがいった。

「だけど、パールハーバーは十二月八日だろ。今日は八月八日だ。月がちがうじゃないか。」

うーん。またみんなで考えこんでしまった。

「ふつふつ。おまえたちがわからないのも無理はない。」

老人の声がひびいた。

「真珠湾攻撃の日から毎月八日は、天皇陛下のみことごの胸にきざむため、特別な記念日となったのだ。それが大詔奉戴日である。」

「あああ、毎月八日は記念日だね。近くのショッピングセンターも、八日が開店記念日なの。全品10%オフですって。」

ユカちゃんがうれしそうにいった。

「おおつ、開店記念日と開戦記念日！」

おねえちゃんが手をたたいたので、みんなで笑った。

ざぶとん一枚だ。

「ぼかものおつ！」

スピーカーからものすごい声がとどろいた。音楽は止

まっている。

ぼくらは青ざめて静まりかえった。

「いまから、そっちへ行く。」

老人の恐ろしい声があった。

写真とみことのり

やがて少尉どのが奥の部屋から出てきた。

そのかっこうを見て、おねえちゃんは声を上げた。老人はいつものぼろいすがたではなく、あの洋だんすの中の写真と同じ、むかしの軍人の正装をしていたからだ。老人は厳肅な顔をしている。

「これから御真影を礼拝する。心せよ。」

「ゴシンエイ？」

おねえちゃんが不思議そうな顔をした。

「あ、おれ知ってるわ。天皇陛下の写真だろ。」

「ぶわかものお！」

倉持君を少尉がどなりつけた。

「御真影とはただのお写真ではない。おそれおおくも……」

ぼくらは緊張して、気をつけをした。

「天皇陛下が全国の小学校にお貸したまいくだされた、大事な大事なお写真である。御真影を拝するのは、おそれおおくも天皇陛下を拝するのと同じなのだ！」

シーンとみんな静まった。少尉は満足して続けた。

「それでは、まず最敬礼の練習をする。」

「いわれて倉持君が軍隊式の敬礼をした。」

「それはちがう。」

老人にいわれ、今度は倉持君は、ナチス式の敬礼をした。高校野球の選手宣誓みたいだ。

「おまえはドイツ人か。あほ。」

口をへる字に曲げて老人は説明をはじめた。

「最敬礼というのは、まず姿勢を正し……」

ぼくらは背すじをのびして足をそろえた。

「正面に注目し、上体をじよじよに前にかたむけるとともに、手は自然に下げ、指先がひざにたっしたところまで止まる。」

頭を下げながら、ただのおじぎではないかと、ぼくは思った。

「そのとき、よけいに頭を下げたり、ひざを曲げたりしないこと。」

あわててぼくは、頭を少し上げ、ひざをきつちりと伸ばした。これはちよつとつらいかも。

「正確にやれば、角度が四十五度になつてははずである。」

「そ、そうなんだろうか。」

練習を終えたぼくたちは、奥の部屋のほうへ連れて行

かれた。そこは、例の高射砲のある部屋のさらに奥だった。

ドアの上に神社の屋根のようなかざりがついている。

しめ縄のようなものが見え、ただの部屋ではないことがひと目でわかった。

それぞれ、ドアの前で一礼をさせられ、中に入ると、そこは奇妙な空間だった。

まわりのかべは、棺桶のような白木でできていて、とても清潔だ。一方だけが、人形劇の舞台のように、ちよつとした、だんになつていて。だんの奥には、何やら銀行の金庫みたいな扉がついていて、それもかなり大きい。

舞台の横には、あざやかな日の丸の旗がかざられている。

「宮城遙拝！」

少尉どのがさげんだ。

「キュウジヨウウハイ……。」

おねえちゃんもみんなも、ぼうつとしていて。

「皇居をおがめといつとるのだ。」

老人はこまつた顔をして東をむいた。ぼくらは少尉どのになつて、東へ頭を下げた。

次に老人は、舞台になつてるところへ行き、だんの上、壁についている金庫のようなとびらに手をかけた。老人は、まつ白い手ぶくろをしている。その手がゆつくりととびらを開けた。

とびらの奥には金庫室のような場所があり、そこから老人は、細長い紫色のふくろを慎重にとりだした。また、なんだかわからないが、白い布でおおわれた板みたいなものも見える。

奇妙なことだが、ぼくは世田谷公園のモニュメントを思い出していた。

「れーい！」

ぼくらは頭を下げた。

老人の手によつて白い布が取りはらわれると、それが古い写真だということがわかった。

「天皇陛下に対したてまつり、最敬礼！」

ぼくはからだを四十五度の角度で曲げた。おねえちゃんも倉持君も、トシキもユカちゃんもやっている。ゆつくりともどもどるとき、誰からともなく息をはく音が聞こえた。

「君が代斉唱！」

ぼくら五人は君が代を歌った。

「れーい！ そのまま！」

少尉どのは紫色のふくろから桐の箱をとりだした。よく見えないが素晴らしい。やがて老人は、天皇のみことのりを読み始めた。ぼくらは頭を下げたまま、それを聞く。

「天佑ヲ保有シ万世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝国天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス……」

なにがなんだかわからない。みんなそうだろう。まるで呪文だ。老人はえんえんと呪文をとなえ続けた。

「重慶ニ残存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尚未タ牆ニ相闘クヲ悛メス……」

呪文は続く。たぶん、さっきのパンフレットに書かれているようなことを言っているのだろうなあと、ぼくは思った。あたまを下げたままなのは、なかなかつらい。

「速ニ禍根ヲ芟除シテ東亜永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝国ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス……」

長い長い呪文が終わった。最後だけ理解できた。平和を確立して、帝国の栄光を守るといいたいのだ。だけど、ギョメイギョジってなんだろう。

「れーい！」

深ぶかと頭をさげてから、ぼくらはようやくもどることができた。おねえちゃんが、大きく息をするのが聞こえる。

「さて、諸君……。」

少尉どのが、みんなに語りかけた。

「諸君らは、このような光榮に会つたのは初めてのことと思う。」

光榮……。ああそうか。天皇の写真を見て言葉を聞いたわけだ。

「諸君らは大日本帝国の子供である。八紘一宇の魂を広め、皇国の平和をおびやかす敵は、討ち滅ぼさねばならない。それこそが、おそれおおくも……」

ハツとして、ぼくは背すじをのびした。

「天皇陛下の大御心であらせられる！」

みんな直立不動でびくりとも動かない。ものすごく緊張している。少尉は満足したのか、おうようにうなずいた。

「それでは、最後に歌を歌わなければならぬ。『海ゆかば』でよからう。『海ゆかば』斉唱！」

ぼくらは声をはりあげ、海ゆかばを歌った。

儀式を終え、居間にもどったぼくらは、ぐったりとつかれた。

「昭和天皇だったな。あれ。」

倉持君がぼそりといった。そういえばメガネをかけていたような気がする。今の天皇とはちがう。

「御真影ってのは、第二次大戦が終わった時、燃やされたり回収されたりして、すべて無くなったはずなんだ。」

「でも、あったじゃん。」

倉持君にトシキが反論する。

「写真なんてどうにでもなるでしょ。作ったんじゃない？」

おねえちゃんがコキコキと首をふった。そうとうくたびれているようだ。

「いや、でもさ。ただの写真じゃなくって、全国の小学校に貸し出されたみたいなのをいってたぞ。と、するとあれは、燃やされも回収もされなかった、本物の御真影なんだ。」

みんな考えこんでしまった。あの老人は何者なんだろう。

「プールに行こ！」

トシキが大きな声でいった。

「とにかく儀式は終わったんだ。泳がなければさぞやねえ、ユカちゃん。」

「わたしもそう思います。泳ぎましょうよ。」

一条ユカがニッコリと笑った。

確かにそうだ。プールだプール。

その日、ぼくらは飽きるまでプールで遊んだ。昼間はみんなでお弁当を食べた。少尉どのも出てきて、サンドイッチをこしらえた。

おなががいっぱいになると、室内でゲームをした。トシキが持ってきたランプをよったり、洋館にあった軍人将棋というボードゲームをやったりした。

軍人将棋というのは、相手のコマの正体を推理しながらやる将棋だ。コマとコマがぶつかった時に、審判が勝ち負けを判定する。少尉どのが審判を引き受けてくれたので、ぼくらはゲームに没頭することができた。

おもしろいことにユカちゃんとか、おねえちゃんとか、女の子のほうが強かった。一番弱いのは倉持君で、誰とやっても勝てない。これは意外な結果だった。

愉快な一日をすこし、太陽が西にかたむくころ、また明日ということばをかけたあつて、ぼくらは家路についた。

八月九日の黙祷

八月九日、じりじりと照りつける太陽の下、なんでこんな朝早くからというぐらい、全員さつさと集合してしまつた。

みんなの合い言葉、それは、プールだった。しかし、洋館から飛びだして、プールのほうに駆けよつたぼくたちは、あせんとした。水がないのだ。

「何よこれー、せつかく着がえたのにー。」

おねえちゃんが悲痛なさけびをあげた。おねえちゃんもユカちゃんも、今日はスポーティーな水着を着ている。競争に目覚めたのではなく、きのうやおとこの水着を休ませているのだそう。

「いったいどうしたんでしょう。」

スカイプールの水着を着たユカちゃんが、小首をかしげた。

その時、プールの底にどうどうと水が流れ出した。振りかえると、少尉が立っている。

「プールとは水をかえるものだ。」

少尉のことばで、みんなほつとした。そういうことか。「水がいっぱいになるまで、時間がかかりそう。」

ユカちゃんが、おねえちゃんの腕をつかんだ。倉持君は腕組みし、トシキはちらちらとユカちゃんたちを見ている。

「気をつけえ！」

少尉どのの怒声がひびいた。

「ただいまから、準備運動を行う！」

みんなあつげにとられた。トシキなど、手を肩に当てたり上にあげたり、ラジオ体操みたいなしぐさをしていく。

「まずは『正常歩』からだ。おまえらの歩き方はなつとらん。プールのまわりを進め！」

少尉の指しめす方向に、ぼくらはぐるぐると歩いた。「なんだ、その歩き方は。足並みが全然そろっておらん。背すじをのびし、頭を垂直にたもて。肩の力をぬいて、腕は不自然に振るな。がに股も内股もいかん。かかとをつけてから、足の裏全体をおろすのだ！」

老人のいうことは、いちいち細かい。これでは足並みなどそろえようもない。

「心を落ちつけて、いっしょに歩くのだ。一億一心、心をひとつとし、国難突破の力となせ。それこそがおそれおおくも……」

ぼくは、ハツとして立ち止まり直立した。後ろでごちやごちやと全員がぶつかつて、止まつた。

「天皇陛下の御ためである！ 何をやつとるかー！」

あわてて、ぼくはまた歩きだした。運動会でもこんな真剣に歩いたことはない。しばらくして、なんとか足並みがそろうようになってきた。

「ようし止まれえ！」

老人の号令で全員停止した。

「水はまだ……。」

トシキがささやいた。

「半分だな。」

倉持君が小声でいった。

「次は天つき運動を行う！」

老人の顔はうれしそう。

「天つき運動ってなんですか？」

おそろおそろぼくは聞いた。

「こうするのだ。」

老人は、両手を曲げてからだにくつつけ、足をガニ股にして力士のように腰を落としたり。

「よいしょ！」

さけびとともに老人は、すばやく両手両足をのびして、大きくぼんざいをした。年寄りとも思えぬ瞬発力だ。

「わかつたか、さあやれ！」

老人の指示で、男たちはかまえたが、おねえちゃんは、顔をこわばらせたまま。口があうあうといっている。

「じ、じーさん、オトメにそのかつこうは、つらいよ。」

「何がオトメじゃ。銃後になう少国民として、このくらいでできなくてどうする。」

「だつてさ、マタをがばーつと……。」

まったくその通りだ。おねえちゃんはともかく、ユカちゃんがかわいそうだ。トシキも倉持君も気の毒そうにそちらを見ている。

「あたしやりませわ。一億一心ですもの。」

ユカちゃんが決意したようにいった。

「そうじゃ。一億一心、八紘一宇のためである。」

老人は重おもしくうなずく。

ユカちゃんもおねえちゃんも、マタをがばーつと開いた。気の毒なので、ぼくらはなるべくそっちは見ないようにした。

「よいしょお！」

老人のさげびとともに、みんなばんざいをした。

「もう一回！」

また、マタをがばーつと開く。

「よいしょお！」

も一度ばんざいをする。

「もう一回！」

「よいしょお！」

何度くりかえしたことだろう。へとへとになってきたころに、プールの水がいつぱいになった。

「もうよかるう。泳いでよし！」

ぼくらはプールサイドにへたりこんだ。しばらく休憩が必要だった。

老人が去ったあと、倉持君がつぶやいた。

「なんか、いろいろ厳しくなってきたような……。」

それでも、元気になったぼくらはプールで楽しく遊んだ。太陽はきょうも派手に輝き、水しぶきは気持ちよかつた。

もぐったり泳いだり水の中を走ったり、声をあげて笑いこぼした。

おねえちゃんが、ユカちゃんの水着をひっぱって、ふざけてるのを、トシキと倉持君がやんやと喜んでる。その時、洋館のほうから、くらしい音楽が聞こえてきた。

「この音楽……。」

『不滅のアレグレット』だ。」

おねえちゃんとぼくはプールからあがった。続いてみんなも出てきた。

「あ……。」

ぼくは思い当たることがあった。

「今、何時？」

誰にもなく聞くと、防水の腕時計をしていた倉持君が答えた。

「十一時になるところだ。」

「長崎に原爆が落ちた時間だよ。」

「八月九日、十一時二分か。」

倉持君がなっとくしたようだ。

しばらくして、音楽が鳴り止み、かわりに小さくサイレンの音がした。十一時二分になったのだろう。

ぼくらは直立し、皇居にむかって黙祷をささげた。

一分間ほどそうしていたあとで、ユカちゃんが声をあげた。

「あ、わたし何をやってるのかしら！ 長崎は反対方向

じゃない。どうして皇居にむかって黙祷しているの？」

「そうだよ！ あたしも何やってんだろ。」

おねえちゃんも、ぼくも、全員が首をひねった。なぜ

ぼくらは長崎ではなく、皇居にむかって頭を下げてんだらう。

このあと、ぼくらは、なんだか遊ぶ気力をなくしてしまい、洋館の中に入って、少し早い食事をとった。

戦火は拡大する

食事の後は「勉強の時間」だそうだ。

少尉はやる気まんまんで、はやくも大東亜の地図がテーブルに置いてある。

老人が何かとりにいつてる間に、倉持君が小さくぼくに話しかけた。

「ケンジ。おととい、あのじーさんがこの地図でいわなかつたことがある。」

中国全土に、日の丸やら爆弾マークやらがはりつけてある地図を、ぼくは見た。

「ここだ。」

倉持君は、大陸のずっと北のほうを指さした。

「ロシアとの国境で戦争があつたんだ。ノモンハンという場所だ。そこで日本軍は大敗北をした。」

「大敗北？」

「ああ。何千人も死んだそうさ。けど、このことは太平洋戦争が終わるまで、固く秘密にされた。国民の士気が落ちるし、陸軍の権威が失墜するからだろうな。」

「ふうん。」

ぼくは地図をじつと見つめた。中国東北部に赤えんぴつで斜線が引いてある。日本がたてた満州国だ。倉持君が指さしたのはその北のほうだ。

やがて少尉どのがやってきて、「勉強」がはじまった。

「前回は昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃までだったな。おまえたちには、ひきような支那を支える米英と開戦になったと教えたはずだ。大東亜の平和を守るための

戦いがはじまったのだ。」

「少尉どの。質問があります。」

倉持君が手をあげた。ノモンハンのことを聞くのだから。やめたほうがいいとぼくは思う。だが倉持君はちがうことを聞いた。

「時間がさかのぼりますが、そもそもなんで中国——支那と戦争になったんですか？ 満州国から一步も出ずに守りに徹していれば、泥沼の戦いに引きずりこまれることもなく、日本は力を温存できていたと思うんだけど……。」

さすがにマニアックな疑問だ。少尉どのはひげをいじり、何ごとか考えこんでいる。

「盧溝橋で最初に銃弾を撃つたのは、支那人のほうだ。」

老人は目を閉じたが、倉持君は納得しない。

「それはささいなことだと思ふ。」

「ふむ。実は支那には数万人の日本人がおつてな。あちこちで支那人が日本人を殺したり傷つけたりする事件が起こつておつた。彼らを守るために軍隊を出す必要があつたのだ。」

老人は一気に話したが、倉持君は食いさがつた。

「日本人を守るためなら、何も大がかりに攻撃しなくても守りにてつするだけでよかつたのじゃないかなあ。じつと一か所にとどまったりやいと思ふ。あるいは日本人を船に乗せて避難させるとか。」

老人は目を開けた。

「ふうむ。おまえらは、思ったよりかしこいな。では、決定的なことを教えよう。」

地図の上の満州国を少尉は指さした。

「あ……。」

ぼくは思い当たることがあった。

「八紘一宇、世界を打ち平らげ、平和を築くことが、わが国の生きる道であるのもまた確かだ。だが、問題は経済なのだ。」

「経済、お金？」

「おねえちゃんの目が輝いた。」

「わが国と満州国は、実は経済的に苦境にあえいでおった。それこそ、存亡の危機といつていいぐらいだった。そこで皇軍が考えたのはこれだ。」

少尉のは、地図上の満州国の南がわに、大きくぐるりと線を引いた。

「ここを支那軍との中立地帯として、ばくだいなお金を投資したのだ。だが、うまくいかなかった。」

「なぜ？」

「みんないつせいに聞いた。」

「支那の政府が日本人に物を売ることも買うことも禁じたからだ。なによりも、日本国の発行するお金が、支那側で流通せんのだ。支那の政府はひきょうにも、大國米英の後ろだてで、独自の通貨を発行してしまった。米英はケタはずれの経済力を持っておるからの。」

「経済かあ……」

倉持君がため息をついた。彼は春まではIT長者の息子だった。

「米英がついてることが信用になる。支那人は支那政府の発行した通貨でしか物を売らなくなった。日本がわの通貨を使わんだ。それで皇軍は敵をたいて貿易を認めさせようとしたのだ。」

「貿易したい相手に戦争をふっかけたの？」

「まあ、そうだ。」

老人がうなずき、トシキが目を白黒した。

「だがそれは、日本にとっては生きるか死ぬかという困難だったのだ。他に方法はなかった。支那の政府はそれを知っているから、わが国の弱みにつけこんで、ずるずると戦争を引きのぼしたのだ。こうなったら、支那の後ろだての米英をたたくより道はない！」

「それでパールハーバーかあ。」

「みんな大ききうなずいた。」

そのあとしばらくは真珠湾攻撃をおさらいして、バンザイ三唱をやらされた。なにしろ、戦艦五隻撃沈の大戦果だ。

「真珠湾攻撃と同じ、昭和十六年十二月八日、皇軍はマ

レー半島北部に上陸開始。」

老人は威勢よく語り、ぼくはマレーシアの北部に日の丸をはった。

「同年十二月十日、マレー沖にて、戦艦プリンス・オブ・ウェールズおよびレパルス撃沈。英国東洋艦隊壊滅だぞ。」

「バンザイ！」

ぼくらはバンザイ三唱した。

「同じく十二月十日、グアム占領。」

「バンザイ！」

「十二月二十五日、香港占領イギリス軍降伏。」

「バンザイ！」

「昭和十七年一月二日、マニラ占領。」

「バンザイ！」

「一月十一日、クアラルンプール占領。」

「バンザイ！」

「昭和十七年二月十五日、シンガポールは落ちたり！」

「バンザイ！ バンザイ！ バンザイ！」

地図が日の丸シールだらけになってしまった。まだ続くのだからうか。

「三月五日、ジャカルタ占領、七日オランダ軍降伏。」

「続々らしい。バンザイ三唱。倉持君がインドネシアに

日の丸をはった。

「三月八日、ランゲーンは落ちたり！」

バンザイ三唱し、ビルマというか、ミャンマーに日の丸がはられた。

「四月五日、スリランカ攻撃。空母一隻、重巡二隻撃沈。」

「バンザイ！」

とうとう、インドの近くまで爆弾シールがはられた。

「昭和十七年四月十八日、米軍爆撃機、東京空襲。」

「バンザイ！」

おねえちゃんがバンザイしたので、ぼくは頭をひっぱたいた。東京に爆弾シールがはられ、みんなそれをじつと見つめた。

「五月四日、日本軍ビルマ制圧完了。」

「五月六日、コレヒドール島陥落。フィリピン制圧。」

東南アジア全土が日の丸だらけになった。まさに大東亜だ。当時の日本人は熱狂しただろうなあ。

ところがそこで老人は話をやめた。倉持君が意味深な表情をしている。

みんなの注目をうけて老人が話した。

「さて、このように、八紘一宇のために、わが国は大東亜の平和を確立したのである。これを大東亜共栄圏という。」

八紘一宇、天皇を中心として世界を征服する。日本は本当にそれをやったんだ。

「それを記念して、諸君にいいものをあげよう。」

「なにかくれるの？」

おねえちゃんが反応した。おねえちゃんにとって、物をくれる人はいいい人なのだ。

「これだ。」

少尉がとりだしたのは、軍人の写っている、二枚のプロマイド写真だった。

「こちらが、連合艦隊司令官山本五十六海軍大将。こっちが、マレーの虎とよばれた山下奉文陸軍大将。」

ふたりの軍人は、お坊さんみたいな顔と、プロレスラーみたいな顔をしている。

「この写真を、今なら特別価格、四百八十円でわけてあげよう。」

老人はきげんよくしゃべり、ぼくらは「うー」とか、「ぐー」とか、変な声を出した。おねえちゃんは、「誰がいるか！」という敵意に満ちた表情をしている。

「ちよつと時代がずれるんだけど、東郷平八郎の写真はないの？」

さすがに倉持君の反応は、ぼくらとはちがう。東郷平八郎といえば日露戦争、日本海海戦の英雄だ。

老人は、にたあつと笑った。

「実はある。おぬしはなかなか見どころがあるな。これが東郷平八郎元帥海軍大将のお写真だ。」

老けたサムライのような軍人が、きびしい顔で写っている。

「それをください。」

「うむ。東郷元帥もおよろこびであろう。」

お金と写真がやりとりされ、倉持君は満足したようだ。

おねえちゃんが、ぼくにそつと耳うちした。

「このあいだ、じーさんがいってた、都合のいい子どもってこういうことなんじゃない？」

「だけど、使命を果たすともいってたじゃないか。」

「プロマイドの販売が使命なんじゃあ。」

「なんかみみちい使命だなあ。」

涙なみだの物語

ちよつと休憩して、みんなでお茶を飲んだ。
少尉がトイレに行っているあいだに、倉持君がぼくに
ささやいた。

「ケンジ。どうしてじーさんは、大東亜戦争の戦果発表
を、あそこでやめたと思う？」

「さあ。」

ぼくは首をふった。

「あの次に来るのは、ミッドウェイ海戦なんだ。日本海
軍が空母を四隻失った、決定的な大敗北だ。」

「あ……。」

戦争映画なんかになっている、アメリカがわの大勝利
だ。ぼくは思いました。

「そこから先は、坂道をころがり落ちるように、日本は
負けていくのさ。」

倉持君はお茶を飲みながら、窓のそとをぼんやりと見
つめた。

少尉がもどつてきて、「国語の時間」になった。ぼろ
ぼろのパンフレットがくばられ、代表して、ユカちゃん
が朗読をはじめた。

髪の毛の長いユカちゃんは、目をふせてゆつたりと読み出
した。

姿なき入城

いとし子よ、ラングーンは落ちたり。

いざ、汝も 勇ましく入城せよ。

姿なく、声なき汝なれども。

昭和十六年十二月、ラングーン第一回の爆撃に、
汝は、別働隊編隊機長として、近郊ミンガラドン飛行
場にせまり、

敵スピットファイアー二十機と、空中戦はなばなく、

陸鷲は、その十六機をほふれり。
更にラングーンの上空に現れ、巨弾を投じたる一瞬、
敵高射砲弾は、汝が愛機の胴体を貫きつ。
機はたちまちほのおを吐き、翼は、空中分解を始めぬ。
汝、にっこりとして天蓋を押し開き……

「脱出だ。早く、パラシュートで逃げるのよ。」

おねえちゃんはさげんだが、続きはちがっていた。ユ
カちゃんは、よどみもなく読み進んだ。

天蓋を押し開き、

二王立ちとなって僚機に別れを告げ、

「天皇陛下万歳。」を奉唱、

若き血潮に、大空の積乱雲をいろどりぬ。

「死んじゃうのかあ。」

「かわいそう。」

ユカちゃんはハンカチで、目をふいた。

一同はくらしい気持ちになった。

次の文章はトシキが読んだ。ちよつとことばがむずか
しいのか、つかかえつつかえ、がんばった。

北満の露

時は明治三十七年の二月、ちようど日・露開戦当時の
ことであつた。トルチハの近くで、露兵の為に捕らえら
れたあやしげな二人の蒙古人があつた。

「ただの蒙古人とはどうしても様子が違う。」

というのできびしく尋問したが、二人は黙々として一
言も答えない。そこで荷物を調べると、地図や手帳の外
に多量の綿火薬が発見された。

「ははあ、こりや日本がわのスパイだな。」

倉持君がつぶやいた。

「スパイって、つかまるとろくな裁判も受けられずに死

刑なんだ。」

「ふうん。」

トシキの朗読は続いた。やつぱり二人は日本人で、軍
法会議のすえ、処刑されることになってしまった。柱に
しばりつけられて銃殺だ。

やがて、二人は柱の前で直立不動の姿勢をとり、つっ
しみ深いしぐさで、はるか東の空、宮城の方をふし拝み、
終つてにこやかに笑みをもらした。静かに沈む赤い夕日
が、二人の顔をそめて、その姿は、まったく神か人かと思
われるばかりであつた。武人の面目を重んじて、目か
くしされることをさえしりぞけた。

空に一声、雁が鳴いて過ぎると、あたりはしんとして
息をのむような静けさ。その静けさを破つて、

「ねえ。」

号令と同時に二烈士は両手を高くあげ、

「天皇陛下万歳」

この声のまだ終らないうちに、

「撃て。」

たちまち響く銃声もろとも、二烈士はついにハルピン
市外の露と消えた。

「ううう。これかわいそ。」

おねえちゃんが、目をぬぐった。

「軍人とはこのように、見事に散ることこそ大事なのだ。」

少尉どのが重おもしくいった。

「次の文章は、諸君らのような子ども話である。チャ
コ。おまえさんが読むのだ。」

「えっ、あたし？」

おねえちゃんが自分を指さした。

愛路少年隊

交通路は、ちようど人間でいえば血管のようなもので
ある。もし、血管に少しでもさしさわりがあれば、から
だの働きも望めないように、交通路に故障が起これば、
国の活動は、たちまちとどこおることになる。ことに支

那のように広くて大きな国では、交通路が何よりも大切である。

(それで愛路少年隊かあ。)

ぼくはぼんやりと考えた。パンフの文章では、愛路村というのがあって、中国軍ゲリラから日本がわが使っている道路を守るための村だそうだ。もちろん、守っているのは、現地の中国人たちで、日本軍がそういう風に組織させたのだ。中には若い少年隊もいる。

おねえちゃんを読み続けた。あるとき、愛路少年隊の一員である子どもが、鉄道を破壊した犯人らしき集団を、墓地で見つける。だが、手投げ弾を投げられ、意識不明の重傷を負って、少年は病院にかつきこまれる。

楊少年は、苦しい息の下から、

「悪者が三人、あの墓地に——」

と叫ぶようにいった。そうしてまたすやすやと眠りだした。まもなく、楊少年は、また何かいおうとして口を動かしている。耳を寄せて聞くと、

「ニッポン、バンザイ。」

といつている。それっきり、少年の息は絶えてしまった。

「やつぱり死ぬの？」

読みながら、おねえちゃんは、なさけない顔をした。

ぼくらはみんな、くらしい気持ちになつて、だれも何もいわない。

なんというか、その、りっぱな最期なんだろうけど、その……。うにいなえない気分というか、とにかく落ちこんでしまった。

「最後は、倉持ユタカ、おまえが読むのだ。」

少尉どのは倉持君を指名した。彼は読みはじめた。

君が代少年

昭和十年四月二十一日の朝、台湾で大きな地震がありました。

「のつけからイヤな予感がする。」
トシキが苦しい顔をした。

公学校の三年生であった徳坤(とくけん)という少年は、けさも目がさめると、顔を洗ってから、うやうやしく神だなに向つて、拝礼をしました。神だなには、皇大神宮の大麻がおまつりしてあるのです。

それから、まもなく朝の御飯になるので、少年は、その時外へ出ていた父を呼びに行きました。

家を出て少し行った時、「ゴー。」と恐しい音がして、地面も、まわりの家も、ぐらぐらと動きまわりました。「地震だ。」と、少年は思いました。そのとたん、少年のからだの上へ、そばの建物の土角がくずれて来ました。土角というのは、粘土を固めて作った煉瓦のようなものです。

父や、近所の人たちがかけつけた時、少年は、頭と足に大けがをして、道ばたに倒れていました。

「うーん。」

おねえちゃんが、腕ぐみをした。気持ちはわかる。

少年の傷は思ったよりも重く、その日の午後、かりに作られた治療所で手術を受けました。このつらい手当の最中にも、少年は、決して台湾語を口に出しませんでした。日本人は国語を使うものだ、学校で教えられてから、徳坤は、どんなに不自由でも、国語を使い通して来たのです。

「国語？」

「日本語のことだろう。」

トシキの疑問に、倉持君がぶつきらぼううに答えた。このあと、徳坤少年は、元気になつて学校へ行きたがったが、その願いはかなわない。それほど重傷だったのだ。

少年は、あくる日の昼ごろ、父と母と、受持の先生にまもられて、遠くの町にある医院へ送られて行きました。その夜、つかれて、うとうととしていた徳坤が、夜明近くなつて、ぼつちりと目をあけました。そうして、そばにいた父に、

「おとうさん、先生はいらっしゃらないの。もう一度、先生におあいしたいなあ。」

といいました。これっきり、自分は、遠いところへ行くのだと感じたのかも知れません。

それからしばらくして、少年はいいました。

「おとうさん、ぼく、君が代を歌います。」

少年は、ちよつと目をつぶつて、何か考えているようでしたが、やがて息を深く吸つて、静かに歌いだしました。

きみがよは

ちよに

やちよに

徳坤が心をこめて歌う声は、同じ病室にいる人たちの心に、しみこむように聞こえました。

さざれ

いしの

小さいながら、はつきりと歌はつづいて行きます。あちこちに、すすり泣きの声が起りました。

いわおとなりて

こけの

むすまで

最後に近くなると、声はだんだん細くなりました。でも、最後まで、りっぱに歌い通しました。

君が代を歌い終つた徳坤は、その朝、父と、母と、人々の涙にみまもられながら、やすらかに長い眠りにつきました。

「やつぱり死ぬのね。」

おねえちゃん、目にハンカチをあてている。ユカちゃんもだ。

「なんでこう、まいどまいど、人が死ぬ話ばかりなんだらうか、ぼくはまたしても、くらいい気持ちになった。」「よいか。男子たるもの、最後はこのように死ぬのである。」

少尉どのが、みんなの沈黙をやぶった。

「台湾の少年でさえ、愛国心を持って、日本のことばを、しっかりと勉強して話していたのだ。まさしく、日本語こそが国語なのである。おまえたちも、国語は話せるか？」

「そりゃ話せるよ。」

トシキがぼそりといった。

「ちゃんとした標準語だぞ。東北弁などはいかん。あれは日本語ではない。」

「あたしたちみんな、東京育ちです。」

ユカちゃんが複雑な顔で答えて、少尉は「それならよい」と、納得した。

そのあとは、みんなで、少年のめいふくを祈って、『君が代』を斉唱した。

時間もおそくなり、ぼくとおねえちゃんは家に帰るところにした。ところが、倉持君、トシキ、ユカちゃんは、泊まっていくという。そのための準備もちゃんと用意してきているらしい。

「ええー。いいないいな。あたしも泊まりたい。」

ダダをこねる、おねえちゃんを引っぱって、ぼくは家路についた。

世田谷少国民団

その日の夜、ぼくとおねえちゃんは、夕飯だというのでキッチンへ呼ばれた。

「あんたたち、毎日どこへ出かけてるのよ？」

ナスのいためものと、キュウリの漬けものを出しながら、お母さんが聞いた。

「プールよプール。」

おねえちゃんが、へらへらと笑った。

「夏休みだったって、遊んでばかりじゃだめよ。ちゃんと勉強はしてるの？」

「そりゃあもう！」

おねえちゃんは、大きくうなずきながら断言した。確かに「勉強」は、やっている。

「お、ナスか。夏はナスだなあ。」

パパがのんきな顔をして、キッチンに入ってきた。仕事が終業時間きっかりに終わるらしく、帰るのはたいてい早い。会社が残業代をケチって、何が何でも五時に終わらせるのだそう。

どうでもいいが、お母さんは、いつの頃からか「お母さん」とよばれるようになったが、パパは今でも「パパである。」

「ねえ、パパ。『不滅のアレグレット』って、こわくない？」

ぼくはパパに聞いた。パパはこの曲が大好きなのだ。

「おお、ベートーヴェン第七番第二楽章だな。そうだなあ。こわいというより、ちょっと悲しい曲だな。その哀愁がたまらないよ。けどな、ケンジ。第七番全体は、むしろ明るくて楽しい交響曲なんだぞ。」

「そうなの？」

「そうさ。人生は明るくゆかいに生きなきゃならん。しかし、明るくふるまうことに疲れたとき、ふっと、人生の意味を考えたりする。それが『不滅のアレグレット』なのさ。」

「ふうん。」

「何が、人生は明るくゆかいに」じゃ。この馬鹿者め！」

毒つきながら、おじいさんが入ってきた。

「そんなことだから、家族もやしなえず、女房を仕事にだすハメになるのだ。おまえには、人生に対する真剣味というものが足りん。」

台所がいつきに暗くなった。おじいさんは、小がらなからだから、いつも毒をまきちらす。

ここはぼくの家であって、ぼくの家ではない。パパが前の会社をリストラされたとき、一家でおじいさんの家にころがりこんだのだ。

「以前のような、ちゃんとした仕事はさがしているのか？ええ？」

おじいさんは、パパをにらみつけた。パパは何もいえず、ただだまっている。

おねえちゃんが、そつとテレビのボリュームを上げた。雰囲気を変えようとしたのだ。

ニュースのアナウンサーは、正社員の数が減少していることをいっている。非正規労働者というのだそう。うちでは、パパもお母さんも非正規労働者ということになる。

「おまえたちがだらしのない人生を送っていると、チャコやケンジも、どうしようもない人生を送ることになるのだ。それがわからんのか！」

ニュースとはおさまいなしに、おじいさんの説教が家族全部に飛び火した。

「よいか、おまえたちは両親のようになっては、いかん！絶対、まともな人生を歩むのだ。」

おじいさんは、ぼくとおねえちゃんの方をむいた。ぼくはなんと返事したのか考えていた。

そのときテレビの画面が変わって、サッカーの会場が映った。試合開始直前のようなすだ。ざわついていた会場が静まり、おごそかに『君が代』が流れ出した。

そのとたん、ぼくは飛び上がるようにイスから立ち上がり、人形のように「気をつけ」をして、直立不動の姿勢をとった。なぜそんなことをしたか、自分でもわからない。

おねえちゃんも同じだったらしい。君が代が流れているとき、ぼくらは身じろぎひとつせず、真剣な顔をして手足をつっぱらせていた。

やがて、演奏が終わったあと、おじいさんはとまどつたように、ぼくらを見た。

「ふうむ。だらしなく育っていると思ったが、意外にこの子たちは、ちゃんと成長しておるな。感心だ。うむ。感心感心。」

おじいさんは、首をかしげつつ、ぼくらをほめた。おねえちゃんが、おじいさんにほめられるなど、はじめてではなからうか。

次の日の朝、ぼくとおねえちゃんが池尻の洋館に行くとき、他の三人は庭へ出ていた。

トシキも倉持君もユカちゃんも、銃をかついでいる。よく見ると、木でできた銃の模型だった。

異様なのは、銃の先に短剣みたいなものがついている。これは「銃剣」というやつではあるまいか。

「おねえちゃんもぼくも、これにはかなり驚いたが、そのあとで、みんながすることに、もつと驚いた。ユカちゃんが銃をかまえた。」

「米英撃滅！」

叫びながらユカちゃんは、ワンピースをひるがえし、近くにあったわら人形に、グサリと銃剣を突き刺した。

トシキも、そして倉持君も、銃をかまえて、次つぎとわら人形に突進した。

「米英撃滅！」

「わら人形は、銃剣で、なんどもくし刺しにされた。みんな息があらぬ。さつきから同じことをやっているのだから。」

洋館のむこうから、老人が歩いてきた。少尉だ。

「少尉どの！ 倉持以下、三名、銃剣術の訓練を終わりました！」

三人は一列にならび、老人にむかって、しっかりとおじぎをした。

「ぼくはこのまま何もいわないのは、おかしいと感じて、とつさに老人にあいさつした。」

「少尉どの、おはようございます！ 月波健二、月波久子、たつた今、到着いたしました！」

「うむ。よく来た。おまえたちも、銃剣を使うがよい。」

「ぼくはトシキから、おねえちゃんはユカちゃんから、木の銃をうけとつた。」

「ぼくらは銃をかまえて、さげんだ。」

「米英撃滅！」

「ふたりでわら人形に、続けざまに銃剣を突き刺した。少尉どのは大いに満足して、全員の中へ入るようになった。ぼくらは、倉持君を先頭にして一列縦隊を作り、足なみをそろえて、移動を開始した。」

洋館の中でぼくらが整列していると、少尉どのが号令をかけた。

「一同、休め！」

みんな足を楽にし、張りつめていた気持ちが一瞬ゆるんだ。「ちよつとケンジ。今日のこの空気、なんか変じゃやない？」

「シッ。」

「おねえちゃんが小声でささやいたが、ぼくは黙らせた。これから何がはじまる。そんな予感がした。」

「諸君らの少国民としての訓練も、少しずつ進歩しておる。だからして、本日はおまえたちに大変ありがたいのをさすずけたいと思う。」

老人はテーブルの上ののっている、桐の箱に手をのべた。

「またプロマイド？」

「シッ。」

今回はちがうようだ。老人が取りあげたのは、金属製のバツジだった。

「これで諸君らは、世田谷少国民団の一員である。」

少尉はひとりひとりの胸にバツジをつけていった。バツジは、つばさを広げた二羽の鳥が上下に並んでいるデザインで、古めかしいものだった。

「これは……ハト？」

「おねえちゃんが、つまらないことを聞いた。ハトではない。鷲だ。」

「バツジをつけた一同に、老人は語りかけた。『よいか。おまえたちは八紘一宇の精神を、あまねく世界に知らしめるのだ。米國がその魔の手を伸ばしてくるとき、おまえたちの力が必要になる。おまえたちは平和のために戦うのだ。』」

「はいっ！」

みんなは声をそろえた。アニメかマンガみたいだった。ひとりだけ返事をしなかったものがある。おねえちゃんだ。

「ちよ、ちよつと、ちよつと。戦うって、どうやって？」

「おねえちゃんは、すっかりあきれている。みんなの態度が大まじめになってしまったからだ。ぼくは朝からこの空気を感ぜとつていた。なんだか、大きな流れに巻きこまれていくような、そんな感じだった。」

「ふふふ。おまえらには、まだ説明しておらんんだな。こちらへ来るがよい。」

老人が、おねえちゃんとおねえちゃんを奥の部屋へ案内した。やはりきのこの夜、みんな何かを見たんだ。

池尻の高射砲

その部屋は、最初に五人がこの洋館に忍びこんだとき見た、あの高射砲の部屋だった。

見るのは二度目になるが、やはりすごい迫力だ。砲身は天井まで届くかというほど長く、ハンドルやレバーが複雑に配置された台座が、その威力を感じさせる。

「各員、配置につけ！」

少尉の号令で、ユカちゃん、トシキ、倉持君の三人が散った。

倉持君は、金属製の四角いロボットみたいなものに向き合っている。白黒のモニターがあつて、そこに文字が表示された。

「風速二・五、風向北北西、気温二十七度、湿度七十六、すべて異常なし。」

倉持君の報告を受けて、少尉がいう。

「目標、高度一万、方位東北東、最大仰角。」

「了解、方位東北東、ドーム回転します。」

トシキが壁のハンドルを猛然と回しはじめた。天文台のドームのような天井が動き出し、ゆっくりと回転した。目を高射砲にむけると、砲自体も静かに回転している。これはモーターのようだ。

「ドーム回転終了」

「安全装置確認、解除します。」

ユカちゃんが床近くのレバーを、回してから押しこんだ。

床の下が見える。砲のまわりが円形の穴のようになっており、不気味な十数個の砲弾が中心をむいて横たわつていた。

「自動装填開始」

砲弾の一つが台に乗ってせり上がり、あつという間に高射砲の下の部分にうつされる。そのまま砲弾は横にスライドし、てこのようなもので、砲の中に押しこまれた。

「ドームを開ける。」

「ドーム開きます。」

トシキが別のハンドルをぐるぐるまわすと、円形の屋根が左右に開いてきた。まぶしい夏の日ざしが差しこんでくる。

「うっ！」

まぶしきでみんな、目をおおっている。
「ひるむな。続ける！」

少尉のことで倉持君が作業を続けた。

「模擬照準自動追尾、コリオリの力、入力されていきま
す。計算終了、発射準備完了しました。」

「よし、ここまでだ！ 砲弾排除しろ。」

「砲弾もどします。」

ユカちゃんがレバーを引いた。

高射砲の下から、砲弾がもどっていく。装填と逆の手
順で床の下へと格納された。

「ドーム閉じます。」

トシキがハンドルを逆に回し、中がうす暗くなってい
く。

「ドーム閉じました。」

「演習終了。ごころうだった。」

あせをぬぐいながら、少尉はいった。そのとたん、全
員の緊張感がとけて、ふーっというため息が聞こえた。

おねえちゃんもぼくも、あつげにとられて一部始終を
見ていた。悪い夢でも見ているようだ。

「おまえたちは、補助要員だ。ケンジは倉持につけ。チ
ヤコは一条について、説明を受けろ。」

ぼくは、倉持君のいる、金属製のロボットみたいな機
械に近づいた。ショックで足がふらついてたかもしれ
ない。

倉持君はあれこれと熱っぽく説明してくれた。風向や
風速のデータは、洋館のもっとも高い、屋根の先にある
装置から送られてくるのだそう。気温や湿度も、砲を
撃つときの、弾道や爆発高度に影響するらしい。

目標物の動きを観測する機械は、少尉のしている別の
装置で、そこからこっちのロボットみたいな機械にデー
タが送られてくる。一度照準を合わせることに成功すれ
ば、ある程度は機械が自動追尾するのだと、倉持君は、
コーフン気味に語った。ちなみにコリオリの力とは、地
球が自転しているために生じる力で、この機械はそこま
で計算する。

それにしてもわからない。どう考えても、これは太平
洋戦争中の機械じゃない。モニターのところに、App
leというロゴがある。白黒でおそろしく古いとはいえ、
これはコンピュータだ。

そのことを倉持君にいうと、この砲は、二十年くらい

前に大改造されて、今の姿になったのだと、彼は夢中
になって話した。

このあと、演習はもう一度行われた。ぼくは倉持君に
教わりながら、モニターの数値を、緊張にふるえながら
読み上げた。おねえちゃんは、一条ユカのやったように、
安全装置をはずし、砲弾の動きをチェックした。

開かれたドームがふたたび閉じられたとき、ぼくは大
きく息を吐いた。本物の砲弾を使っていることが、とて
つもない緊張をぼくらにあたえていた。

演習が終了したのち、少尉がぼくに声をかけた。

「ケンジ。どうも、おまえは腹がすわつたらんようだ。
これから度胸だめしをしよう。」

老人に肩をたたかれたとき、まわりから、クスクス笑
いがおこった。

廊下に出て、むかい側のドアを開けると、そこは細長
い部屋だった。ボウリング場のレーンのように、長い空
間の先に、黒い人影が見える。ひらべったくて、影絵の
ようだ。

「これを撃て。」

少尉はぼくにピストルをわたした。

「こ、これ、本物？」

「本物だとも。」

白髪の下が目がぎよろりとぼくをにらんだ。これはお
そろしく古い拳銃だ。将校が持つような、ドイツ風の形
をしている。

「あの、まをねらって撃て。そのままに安全装置のレ
バーを銃口へまわせ。そう、そうだ。」

ぼくは安全装置をはずしてから、両手で拳銃をかま
え

た。
「もつと腰をおとせ。息を止めて、静かに引き金を引く
のだ。」

引き金を引いた瞬間、すごい音と、強烈な振動が両手
につたわって、ぼくは尻もちをついてしまった。

あざ笑うような笑い声が、まわりから聞こえてきた。
「情けないやつだ。おい、宮村、手本をみせてやれ。」

トシキがにやにや笑いながら、ぼくから拳銃を受けと
った。

彼は、映画俳優のように、ごく自然に銃をかまえた。
すうっと息を吐いて引き金を引くと、かわいた発射音が
して、人影のまん中にポコッと穴があいた。

命中だ。目の前の床に、コツンと葉莢が落ちてきた。
「こうやるんだ。」

自信まんまるで、トシキがいった。

「おねえちゃんが、少尉に質問した。
「ねえ、少尉。こんな本物の武器を使って、何をしよう
つての？」」

「おねえちゃんは、真剣な顔だ。
「何をやるわけでもない。力を所持していることが重要
なのだ。八紘一宇の魂を持ちつづけるには、いつでも戦
う気が必要だ。そのための武器なのである。」

「白いひげの中の顔が、無表情でこわい。少尉のしわの
きざまれた顔が、おねえちゃんをにらみつけた。
おねえちゃんは、明らかに少尉のことを疑っている。
にらみかえしたおねえちゃんは続けた。
「少尉。みんなを何かに巻きこもうとしているんじゃない
の？ もし、そうなら、あたし許さないから。」

じつと、おねえちゃんは少尉の表情をうかがっている。
ふたりのあいだに火花が散っているようだ。
「それはちがうよ、チャコさん！」

トシキが少尉をかばうように、立ちふさがった。
「おれたちは、この夏でいちばん、やりがいのあること
をしているんだ。こんな真剣になにかをやったのは、はじ
めてだよ、おれ。」

みんなの目が、おねえちゃんをにらんでいる。倉持君
も、一条ユカも、トシキと同じ思いらしい。
「うまいえないけど、こんなおもしろいことはない
おれは思う。楽しいんだ。」

倉持君が率直にいった。
「とびっきりの夏になりそうなの！」

一条ユカが、よくわからないことをいった。どうい
うことだ？
「うう……。」

少尉が胸をおさえてうめいている。
「少尉どの！」

「少尉さん！」
ほかのみんなが駆けよった。
「なに、なんなの？」

「おねえちゃんの質問にトシキが答えた。
「少尉どののは胸が悪いらしくって、ゆうべも苦しんで
たんだ。」

少尉の顔からあぶら汗がながれ、じきにおさまった。「気に入らないのなら、出ていってもかまわんぞ。」苦しそうな顔で、少尉が微妙な言い方をした。ユカちゃんがおねえちゃんをにらんでいる。トシキもユタカもそうだ。おねえちゃんとぼくは、みんなの視線に追われるように、玄関へむかった。

数分後、おねえちゃんとぼくは、門の外にいた。トシキがちやりと門にかぎをかけ、さっさと洋館の中へ入っていった。

青空のむこうから、かすかに声が聞こえてくる。――「ただいま……、世田谷区に……、光化学スモッグ注意報が……、発令されています……。できるだけ……、外へ出ないように……、してください……」防災無線だ。おねえちゃんとぼくは、駅に急いだ。ふたりとも無言だった。

一条ユカ

家に着いたぼくは、おねえちゃんの部屋にいた。ぼつかりと時間があった。今は夏休みだ。ふたりとも何もいわなかった。ぼくもぼうぜんとしていたが、おねえちゃんもぼうぜんとしている。ぬぎ散らかしたスカートやシャツにうまれて、ベッドに横になっていた。

ナチュラルメイクの横顔が、天井を見てはため息をついた。ショートカットの黒髪を、ときどきかき上げては、ぶらんとベッドの横に手をおろす。

開けはなした窓から、そろそろ熱くなってきた空気が流れてくる。おねえちゃんのとおりとしたほおや肩に、汗がうかんだ。

おねえちゃんの表情が、だんだんはつきりしてきた。何かを考えているような顔だ。めったにないが、そんな時だけは、りりしく賢そうに見える。

部屋が暑くなってきたので、ぼくはキッチンに移動した。お母さんがパートに出かけるしたくをしている。テレビをつけると、新しいアメリカ大使が着任したという、つまらないニュースをやっていた。おねえちゃんもキッチンに入ってきた。

「お母さん、お母さん！」
「なあにチャコ。」
「池尻にある、古い大きな洋館のこと、知ってる？」
「洋館？」
「レンガづくりで、でっかいのよ。お化け屋敷みたいな。」

「お化け屋敷ね……。」
お母さんは少し考えていたが、ふっと顔がゆるんだ。「知ってるわけないわ。私、このへんで育ってないもの。」
「知らないのかあ。」

おねえちゃんは肩をおとした。「でも、チャコ。お化け屋敷で思いましたんだけど、パパに聞いたことがあるわ。子どものころ、そういうウワサを聞いて、わざわざ遠くへ見に行ったことがあるって。」
「それで？」

「その場所が、三軒茶屋のむこうっていったのよね。もしかして、そのことなんじゃないの。」
「それだよ！」
「ビンゴだ。おねえちゃんの顔が明るくなった。」

「なんでも、しのびこんだ子どもが何人も消えているのか。」
「ええっ！」
「よくあるウワサでしょ。でも、それしか知らないわ。パパも中に入ったわけじゃないようよ。なんなら、おじいさんにも聞いてみたら？」

「うっ。」
おねえちゃんは、ぐっとつまつた。おじいさんは苦手なのだ。毒をまきちらすおじいさんは、特におねえちゃんにきびしい。

おねえちゃんは腰に手をあてて上を向き、口への字にむすんだ。美しくない顔だが、真剣に悩んでいる。お母さんは、仕事に出ていってしまった。

決心したように、おねえちゃんはリビングにむかった。さつきから高校野球の音が聞こえてくる。おじいさんが居間で観戦しているのだ。

おねえちゃんは、おそるおそる居間に足をふみいれた。なかをのぞくと、甲子園の歓声のなかで、おねえちゃんが、何かおじいさんに聞いている。

おじいさんはうるさそうに手を振っているが、おねえちゃんが、身ぶり手ぶりをまじえて、話を続ける。やがて、何かを聞き出したおねえちゃんは、首をかしげながらもどつてきた。

台所で冷蔵庫をあけたおねえちゃんは、コップにコーラをついで、ごくごく飲んだ。それから廊下に出て、電話の受話器をとりあげ、誰かと話をした。

「チャコだよ。出られない？ ……、……、……三十分後ね。場所は……。」
電話が終わるやいなや、おねえちゃんはぼくの腕をひつつかんで、外へ飛びだした。

「ど、どこへ行くの？」
「池尻。」
駅の階段をおりて改札をぬける。地下鉄にゆられながら、おねえちゃんは、さっきのことをぼくに話した。

「おじいさんに聞いたなら、何十年前も前に、あの館のそばを通りかかったことがあるっていった。」
「何十年？ いつごろのことだろう。」

「そのころは、お化け屋敷なんかじゃなくて、きれいな洋館だったらしいよ。畑や林が広がって、このへんは田舎だったんだって。」
「そうか。大昔なんだ。」
「で、あの洋館には子どもがいたんだって。」

「え？」
「ピンとこないでしょ。あんなところに子どもがいたなんて。」
「それって……少尉どのの子どもかな？」
「わかんない。男の子と女の子を見たような気がするって。」

「大昔の記憶かあ。」
「珍しい家だったから、覚えているんだって。」
「ふうん。」

電車は池尻につき、ぼくらは階段を上がった。池尻の駅名は池尻大橋だ。おねえちゃんは、246沿いに大橋のほうへあるいていく。やがて、大きな道路との合流点に出た。上には首都高。目の前には歩道橋がある。

暑い。ぼくはおねえちゃんの後ろから歩道橋を登っていった。タンクトップの涼しそうなかっこうをしている、おねえちゃんがうらめしい。

「おねえちゃんが時計を見ている。ここは洋館から近い。誰が来るの？」

「一条ユカ。」

ケータイに電話して、ユカちゃんを呼び出したのか。しばらくして、ユカちゃんが、時計を見ながら歩道橋の上に登ってきた。

彼女はぼくらを見つけると、口もとをひきしめて、まっすぐ見た。

「こんにちは。チャコさん。ケンジくん。」

長い髪の美少女は、けさ会ったばかりなのに、ていねいにあいさつした。

「少尉は何をたくらんでるの？」

だしぬけにおねえちゃんは聞いた。ごうごうと車が流れていく音が、周囲のビルの中でくぐもってひびく。

「うふふ。なんだと思います？」

少女は首をかたむけた。黒髪がふわりとゆれた。

「あの家には大昔から、子どもがいて、何人も消えているの。いや、そういうウワサだよ。少尉が何をしようとしているのか、話してちょうだい。」

おねえちゃんは、一条ユカに真剣に切りこんだ。ユカちゃんの顔から笑みが消えた。

彼女はすりに手をかけ、下の道路を見た。はるかかなたから、切れ目もなく車が流れてくる。

「何もかもめっちゃめちゃにしてみたいと思ったこと、ありません？」

「ゆううつそうに、少女はつぶやく。」

「は？ わりとしょっちゅう思ってるけど。」

「この夏、それが起こりそうなの。」

ユカちゃんは、車の流れてくるほうを見つめた。

「使えんだね。少尉はあれを。」

おねえちゃんは、ユカちゃんをじつと見た。ユカちゃんは否定しなかった。

「何を撃つさ。アメリカの爆撃機なんて、飛んできやしないでしょ。」

「飛行機はこななくても、馬車はくるの。シンデレラの馬車は、走りだしてはいけないのよ。」

一条ユカは意味不明のことをいった。

「そして私たちは立てこもるの。戦って戦って、玉砕するんだわ。」

「ちよつと、ユカちゃん！ だいじょうぶ？」

「じろりと一条ユカは、おねえちゃんをにらんだ。」

「何もかも、めっちゃくちゃにしたいって、さっきいったでしょ。チャコさんとは意味がちがう。」

「そりや、ちがうでしょうよ。」

おねえちゃんは、ぶつきらぼうにいった。

ふたりの間でピシリと緊張が走り、おねえちゃんはユカちゃんにいった。

「あなたは、いいトコのおじょうさんで、友だちにも恵まれていて、成績だって、うちのケンジよりいいみたい。それもガリ勉してるわけじゃなし、もともと頭がいいんだ。」

確かに、一条ユカは頭がいい。

「それにユカちゃんはきれいだよ。男の子にもモテモテでしょ。」

ぼくは心の中ではげしく同意した。ノーマイクでおねえちゃんよりずっとかわい。

「しかも、女の子の外泊を許すなんて、やさしくって、理解ある両親だと思うよ。ゼータクだよ。あなたはいったい何が不満なの？」

かなたから車が流れてくる。その上には青空が広がり、照りつける太陽の光がまぶしいくらいだ。

「そう。わたしはめぐまれているわ。退屈なほどめぐまれている。」

かたい顔をして、一条ユカは語りだした。

「父も母も先生も、私が何をしてもよろこぶわ。両親は私が何を望んでいるか、いつも先回りしてかなえてくれる。それがたまたまなくイヤなの。」

「イヤ？」

「わからないでしょうけど、とにかくイヤなの。自分で歩いているようで、本当は歩道のほうが動いているみたいなの、そうじゃなかったら、走ってる新幹線の中を歩いているような、すごく意味のないことをしているみたいなの、そんな感じがするの。」

「ふうん？」

おねえちゃんは首をかしげた。理解できないらしい。たしかにむずかしい話だと思う。

「あついでしなうと不幸になることが世の中にはある。」

ぼくはそれを知っている。一条ユカはそれに気づいてしまったのだ。

ぼくらは、自分が子どもだつてことを意識したことなんか知らない。おねえちゃんもあんまりないだろう。一条ユカは、それに気づいてしまつて、ぼくらがもともと持っているような、無力感といったらいいのだろうか、そういうものを感じているのだ。

一条ユカの表情がゆるんだ。

「ねえ、このまま日ざしの中で歩道橋の上にいると、そのままゆっくりと舞い上がっていく気がしません？」

「やわらかい目をして、ゆつたりと車の流れを見つめていく。」

「わたし、高いところで、しょっちゅうそんな気分になるの。こんな歩道橋や、学校のペランダで、いつもこのまま飛べたらどんなにいいだろうと思ってる。」

一条ユカがぼくを見ている。ぼくも彼女を見た。

ぼくは感じていた。熱気の中で、気分がすーっと体をはなれ、どこまでもどこまでも上昇していくような、そんな感覚だ。

ぼくたちは、車の洪水の上で、ゆっくりと上昇していく。暑く青い空へと昇っていくが、決して空を見上げることはない。見るのは足もとの車の流れ。そしてビルのモザイクでできた地平線だ。

ぼくはそう思っていたし、一条ユカもそう感じていたにちがいない。

彼女は洋館の中で何が起こっているか、はつきりしたことは何もいわないまま帰って行った。

シンデレラの馬車

ユカちゃんがいなくなり、歩道橋の上から人影が消えたときに、おねえちゃんがさげんだ。

「ケンジ！ 高いところへ！」

ちよつとおどろいたが、ぼくの口からはマントラが出た。

「オー……、ハレー・クリシュナ・スタパティ

ア・ハレー……」

おねえちゃんの胸のペンダント、カウストウバがぼうつと緑色に光った。

「シッデイ・マハー・シッデイ！」

まわりの空間がマープル模様にくにやりと曲がり、次の瞬間、近くのビルの屋上にぼくらは立っていた。ぼくは必死でおねえちゃんの腰にしがみついている。

「もっと高いところ！」

またまわりの空間がぐにやりと曲がり、いちだんと高いビルの屋上に、ぼくらはたどりついた。

一面、まっ昼間の東京だ。右のほうに世田谷公園の緑が広がっている。東のほうは目黒区。それを飛びこえろと、渋谷のビル群がそびえている。後ろのほうでは、246とその上の首都高を車が流れている。

少しだが風がこちょいい。だが、おねえちゃんはいらついている。

「何？ どこ？ 少尉はこの景色の何をねらってるの？」

「おねえちゃん。地図がなきゃ、なんにもわかんないよ。」

「そうか。書店へ！」

ぼくの口からふたたびマントラが出て、ぼくはおねえちゃんにしがみついた。

空間がマープル模様にくにやりと曲がり、書店の中にぼくらはあらわれた。なんか、カウンターのの中のおじさんが、目をまん丸にしてるけど、今はそれどころじゃない。

おねえちゃんは東京都の地図を探しだした。ハンデイベで千二百六十円だ。

「ケンジ。出しといて。」

「ええー？」

おねえちゃんに逆らってもしかたがない。ぼくはサイフから千二百六十円びつたり出して、カウンターに置いた。レジの中のおじさんは、まだ固まっている。

「さあ、もどりましょ！」

ぼくの口からまたマントラが出て、空間がぐにやりと曲がり、ビルの上になった。

おねえちゃんが地図を調べているとき、ぼくはぼうつと世田谷公園を見ていた。思えば、この公園からすべては始まったのだ。巨大な公園には丘があり森があり池があり噴水がある。中では鉄道まで走っている。五分のスケールの立派な蒸気機関車が、休日には汽笛を鳴らし

て走るのだ。ぼくも乗ったことがある。

「うわあっ！」

おねえちゃんが、すつとんきような声をあげた。

「ケンジ！ あたしたち、今、どこにいると思う？」

「え？」

ぼくは地図をうけとった。世田谷のページで世田谷公園を見つけて、そのとなりを見た。

「げっ、自衛隊？」

「そうだよ。ここ自衛隊の病院だよ！」

地図を見ると、となりの建物は自衛隊の駐屯地だし、そっちの建物は防衛省の技術研究所だ。

「こっここここ……」

おねえちゃんの声がうわずわっている。ぼくもどろろき激しくなった。

「ここなのかな？ ここに砲弾を撃ちこむ気なのかな？」

「いや、まだわかんないよ。おねえちゃん。」

ぼくは、あのことが気になっていた。

「ユカちゃんがいってたじゃないか。馬車が来る。シンデレラの馬車は走りだしてはいけない」って。このへんで、馬車は走ってたっけ？」

「さあ。」

「世田谷公園は？ SLは走ってるよ。」

「知らないよ。あたし。」

ぼくらは一度、家に帰ることにした。家で区や東京都の情報を調べるのだ。

まわりの空間がマープル模様にくにやりと曲がり、次の瞬間、ぼくらは家の二階にいた。

ぼくはパソコンのキーをたたいた。＃馬車＃＃馬車＃

＃馬車＃だ。馬事公苑には馬車があるけど、こんなところ砲撃しても意味がないだろう。横浜の馬車道も、スパゲティの馬車道もなんの関係もない。

だめだ。そもそもこんなローカルな情報なんて、ネットでもわかるわけがない。

一階に行くと、おねえちゃんは古新聞を調べていた。必死でローカル面を読んでるけど、何も出てこない。

その時、ぼくの口からマントラが流れた。

「オーン・サラスヴァティ(弁才天)・スヴァーハー……」

家中の情報誌がふわふわと飛んできた。古新聞、区や都のお知らせ、パンフ、チラシなどが、ぼくとおねえちゃんのまわりをぐるぐる動いた。

おねえちゃんの目は緑色に光り、それらの情報をスクリーンでもするように、ものすごいスピードで読んでいる。読み終わった紙は自然にたたまれて、床に落ちた。

次つぎと新聞やチラシが流れてきたが、かんじんの情報は見つからない。おねえちゃんにスキャンされた紙は、うずたかく積み上がるばかりだ。最後の一枚が読み終えられて、おねえちゃんの目の光が消えた。

「どうだった？」

ぼくが聞くと、おねえちゃんは首をふった。

「だめ。まったく手がかりなし。」

おねえちゃんは床にへたりこんだ。つかれたらしい。ぼくらは途方に暮れて、居間にころがっていた。日が

かたむいて、夕方が近づいている。

「たぐいませ。チャコ、ケンジ。」

玄関のほうで声がする。お母さんが帰ってきたのだ。もう、こんな時間だ。ぼくらはなんの収穫もなく時間をむだにしている。

「おかえりなさい。」

とりあえず、ぼくはお母さんを玄関まで出むかえた。

めずらしく、おねえちゃんも出てきた。ほかにやることになかったのだろう。

「麦茶のむ？」

「あらあ、気がきくじゃないチャコ。めずらしいわね。」

お母さんは居間に入ると、おねえちゃんが差し出した麦茶をごくごく飲んだ。それからテレビのスイッチを入れた。

ニュースをやっていた。東京のビル街を、＃シンデレ

ラの馬車＃が走っている。

「おねえちゃん！」

ぼくとおねえちゃんは身じろぎもせず、その映像を見ていた。

「ははあ。これはVTRね。前回の時の映像を流してるんだわ。」

お母さんがつぶやいた。たしかに画面のすみには、VTRと書いてある。

——と、このように馬車は丸の内を走ります。観光客には知られていますが、意外と東京都民は知りません。明日は米國大使一行が登場するそうです。大使着任の儀式でした。

「懐かしいわあ、私も見に行つたことがある。おとぎの

国の行列なのよねえ。」

「お母さん！ それって米国大使の儀式なの？」

おねえちゃんが、かみつくように聞いた。

「どこの国の大使も着任するとやるそうよ。しよっちゅうやってるわ。丸の内から皇居まで、しずしずと馬車の行列が進むのよね。」

「皇居？ なんのために？」

「決まってるじゃない。天皇に会うためよ。」

おねえちゃんは、ぼくを見た。ましがいいない。

お母さんが台所に行ったあと、おねえちゃんは地図をひろげた。

「明日、丸の内をねらうのかな？ ケーサツに知らせようか。」

「こんなこと、誰も信じないよ。それに、馬車の行列をねらうなんて、無理だと思う。」

「まてよまてよケンジ。馬車に乗るのはアメリカの大使なんだよね？」

「うん。着任したばかりの新しい大使だって。」

「その人は今、どこにいるの？」

「どこって、アメリカ大使館なんじゃない？」

ぼくとおねえちゃんの目があった。
ぼくたちは、必死で地図の上のアメリカ大使館をさがした。

「あつた！ 赤坂だ。」

「丸の内より近いよ、おねえちゃん。しかも大使館公邸がとりにある。これ、重要文化財だ。」

「きつと、でっかい建物だよ。今夜のうちに砲撃すれば、シンデレラの馬車は走りださない。」

「ひゃ、ひゃくとうばん！ 今度こそ警察に電話だ。おねえちゃん！」

おねえちゃんは、電話に飛びつき、110番した。

「アメリカ大使館がねらわれているんです！」

「はあ？ 誰ですかあなたは。」
「誰でもいいでしょ。とにかく、大使公邸が爆破されるんです。」

「えっ、テロの計画があるのですか。爆発物を使うとか？」

「それが何キロも離れたところから、でっかい大砲でどかーんと砲撃されるの。」

「……………」

「もしもし、聞いてるんですか？ もしもし！」

「いたずら電話もたいがいにしなさい！」

ガチャンと乱暴に電話を切る音がして、おねえちゃんが顔をしかめた。

「ぜんぜんだめ。」

「どうしよう、おねえちゃん。」

「行こう！ 池尻へ！」

警察になんか知らせてる場合じゃない。ぼくの口からマントラが出た。おねえちゃんにしがみついた瞬間、ぐにやりと空間が曲がって、ぼくたちは池尻へ飛んでいた。

池尻の闘い

マーブル模様の空間が正常にもどったとき、そこは洋館の屋根の上だった。

すでに日は暮れている。むし暑い夜、庭木の影のあいまから、渋谷のビルの灯りが見えた。

屋根のずつと先に、天文台のようなドームがある。

「回転してる！」

おねえちゃんがさげんだ。
たしかにドームは動いている。おねえちゃんは、屋根の上を走りだした。

回転が止まり、こんどはドームは開きだした。東と西の線に割れ目が入り、どんどん開いていく。その線の先には赤坂があり、米国大使館があるはずだ。

おねえちゃんは、ドームにとりついていて、どうすることもできない。ぼくはようやく、おねえちゃんに追いついた。

「オーン……、ハレー・クリシュナ・スタパティア・ハレー……」

口から神聖な音声がもれだし、ぼくはおねえちゃんにしがみついた。

「シッデイ・マハー・シッデイ！」

空間がマーブル模様にぐにやりと曲がり、次の瞬間、ぼくらは、巨大な高射砲の上にあった。

「照準自動追尾、ユリオリの力、入力されていきます。計算終了、発射準備完了……」

そこまでいってから、倉持ユカは目をまん丸にして、ぼくらを見上げた。

高射砲の砲身の上に、ぼくは猫みたいにならずくまっていた。おねえちゃんは砲身にしがみついて、バカみたいに足をぶらさげている。床から五メートルはあるだろう。

「ケンジ！ なんてこんなところに！」

「し、知らないよ！ おねえちゃんのせいだ！」

声が聞こえたのか、少尉が上を見た。

「ウヌッ、おまえら、じやまをしに来たのか！」

少尉は、ふところから拳銃をとりだすと、こっちへむけた。

「おりてこい！」

「いやあ！ 撃たないで！」

おねえちゃんが足をバタバタさせた。

「おりてこいというに！」

「おりたいのは山やまなんだけど、動けないんだよー。」

少尉は湯気を出して怒った。

「ようし撃つぞ。本気で撃つぞ。念仏をとなえろー！」

そのとき、ぼくの口からまた、神聖な音声がながれた。

「オー……、マニ・パドメ・フーム・タット・トゥバム・アシ・ハレー・ハヌマン（猿神）！」

カウストゥバが光り、おねえちゃんの目の色が変わった。空中でぐるりとさかあがりすると、らせんをえがいて、しゅるしゅると高射砲をおりてしまった。

続いて、右に左に、拳銃の銃口をさけながら、みごとなフットワークで少尉にせまる。少尉があつげにとられて口をあけたとき、おねえちゃんの回しげりが炸裂した。

少尉の手から拳銃がふつとぶ。カラカラと軽い音がして、ぼけらつと見えていた宮村トシキのほうへころがった。

トシキはあわてて拳銃をひろった。ねらいを定めようとしたが、そのときすでに、おねえちゃんは、この円形の部屋の「壁」を走っていた。特撮映画のアクションのように、おねえちゃんは、真横になって、壁を走っていく。動けないトシキにパンチをくらわせ、またしても拳銃がふつとんだ。

拳銃はカラカラと、今度は一条ユカの足もとにころがった。彼女は銃をひろいあげ、ピタリとおねえちゃんにむけた。

「動かないで！ このまま砲撃を続行するのよ！」

一条ユカのかわいい顔が、ひどく真剣にゆがんでいる。

だが、ぼくはあんぐりと口をあけた。

「ぼくだけじゃない。トシキも倉持君も、おねえちゃんまで、目をまんまるにして、口をあけている。」

「一条ユカは、銃をあべこべに持っていた。拳銃の銃身のほうを握って、グリップを相手にむけているのだ。」

「ユカちゃん、その銃……。」

「動かないでって、いつてるでしょう！」

「彼女の指が引き金にふれた。」

「ちよ、ちよっとその状態で撃つたら……。」

「やめろ！ 大げさするぞ！」

トシキも倉持君もパニックになった。ぼくも加わって、反対だ反対だと大声をあげた。

ユカちゃんは何をいわれているのか、なかなか理解できない。

そのうち、彼女の視線が、おねえちゃんを通りこして、そのむこうへうつった。

みんなもその視線を追った。そこには、胸をおさえて、もがいている少尉の姿があった。

「少尉さん！」

ユカちゃんが拳銃を放りだして走った。

「少尉！」「少尉どの！」

高射砲の上からおりられない、ぼくをのぞいて、みんなが少尉に駆けよった。

「胸の発作だ。」

「ひどく苦しんでいる。」

「ユカちゃん！ 救急車！」

「一条ユカはケータイを出した。」

「さて。この住所、知ってるやついるか？」

宮村トシキが聞いた。

「いや、GPSケータイなら、むこうで住所を勝手にしらべてくれるはずだ。」

「さすがに倉持君はくわしい。一条ユカは119番を押して、あれこれと話をはじめた。」

「え？ 名前？」

「すぐに彼女は、すつとんきような声をあげた。」

「ねえ、だれか少尉さんの名前、知ってる？」

みんな顔を見あわせた。そういえば、少尉の本名をだれもしらない。

「少尉です。とにかく少尉さん。えっわたしですか？」

「一条ユカはとまどった。なんと説明すればいいのだろう。」

「近所の子ども。」

「おねえちゃんが、小声でたすけ船をだした。」

「近所の子どもです。だから、その、名前、しらないです。」

「この部屋じゃまずいな。」

倉持君が、しごくもつともなことをいった。

「リビングのソファアームにみんなでそっと運ぼうよ。」

「おねえちゃんの提案で、(ぼくをのぞく)全員が少尉をゆつくりと運んだ。そのあいだに、ぼくは四苦八苦して、やつとのことで高射砲からおりることができた。」

サイレンが近づいてくる。

みんなは少尉のそばにいたが、ぼくは洋館を出て、鉄柵の門をひらいた。やってきた救急車をまねきいれ、玄関のそばに車を誘導した。

「どかどかと救急隊員たちがおりにきた。」

「患者はどこです？」

「こつちです。こつち！」

洋館の中に入った隊員たちは、酸素マスクのようなものを当てたり、なにやら応急処置をほどこしていたが、すぐにタンカが用意され、救急車で運ばれることになった。

「あたしがつきそいます。あたしが一番年上なんです。」

「おねえちゃんは、きつぱりといつた。」

「……………いいでしょう。」

「おねえちゃんは車に乗りこんだ。ちよっと、いや、かなり不安だったので、ぼくも乗りこんだ。」

「救急車は発進した。保険証とか、かかりつけの病院とかいわれても、ぼくらは何も答えられない。ただ洋館の電話番号だけは、ぼくは調べてあった。」

「ケンジ。」

「おねえちゃんは真剣でまじめな顔だ。」

「一度、救急車に乗ってみたかったの。」

「表情ひとつ変えず、おねえちゃんはいつた。こういう人だから信用できないのだ。」

「横になって少尉の容態が悪化していた。なにやらうわごとをいつている。」

「音楽が聞こえる……、ベートーヴェン第七番第二楽章……………」

(不滅のアレグレットだ。)

「この老人のなかで、今、あの曲がながれているのだ。どこまでもどこまでも歩いていく、くりかえされるあの曲が。」

「亡霊どもがやってくる……インドで殺したやつらだ……。」

「少尉、しつかりして！ 亡霊なんかいないよ。」

「心配そうな顔で、おねえちゃんが、少尉の腕をつかんだ。」

「進め……みな殺しにしろ！ 進め！」

「少尉！」

「おねえちゃんは、どうしていいかわからず、泣きそうになった。」

「……………ヒーツヒツヒツヒツ……………」

「老人はうなざれている。うなざれながら苦しみ、うなざれながら笑っている。そのとき、ぼくの口からマントラが流れた。」

「オーン……、ガター・ガター・パーラガター、パーラサンガター・ボーデイ・スヴァアーハー……………」

あとで調べたら、これは般若心経の一節だったらしい。おねえちゃんの胸のペンダント「カウストウバ」が緑色に光った。

「おねえちゃんは悲しい目をしてカウストウバを首からはずし、少尉の手をとって、そつとふれさせた。」

「少尉の顔から苦痛が消えていった。おねえちゃんは少尉の肩にやさしくふれた。そのまま少尉はねむりに落ちるように、やすらかな顔になった。」

増山権吉

結局、少尉は助からなかった。

「かつきこまれた救急病院は、かなりおんぼろだったが、スタッフは、できるだけ手をつくしてくれたのだと思う。だが、少尉が二度と目を開けることはなかった。」

「少尉の親族に連絡しなくてはならないということで、おねえちゃんは、池尻の洋館に電話した。」

「そうなんだよ。とにかく連絡先みたいなものがない？え、ある？ 木崎礼子……住所は板橋。うん。番号は……」

ぼくは電話番号をメモった。おねえちゃんが、その女の人に電話すると、その人は少尉の妹だということがわかった。すぐにやってくるという。

病院の前の街灯に、虫が数匹、羽音をたてて飛びまわっている。虫は何度もライトにぶつかり、耳ざわりな音をさせた。

どんよりとした夏の夜空には星もみえない。とてもむし暑い夜だった。

おねえちゃんとぼくは、病院入り口の階段に腰かけていた。おねえちゃんは何もいわない。手の中でカウストウバをころがしている。

車のライトが近づいてきて、入り口に止まった。中から女の人がおりてくる。おばあさんといったら怒られそうなの、背すじのしゃんとした人だ。

「あなたがチャコさん？」

その人は、おねえちゃんに聞いた。

おねえちゃんは、うなずいて、頭を下げた。

「どうも、コノタビは……」

ドラマかなんかで覚えたんだろう、型どおりのことばであいさつした。

「兄は？」

あれこれと、おねえちゃんは説明した。少尉はすでに霊安室にうつさされている。

「兄に会います。」

その人、木崎礼子さんといっしょに、ぼくらは霊安室へむかった。木崎さんの、どんなさんらしき人が、いっしょについてきた。

うす暗い部屋のライトがつくと、横たわって、顔に白い布をかぶせられた少尉のすがたが見えた。

木崎さんは、そおーっと布をとり、少尉の顔を見た。人形のように生気をうしなっているが、髪とひげとまゆ毛が白い、よく知っている老人の顔があった。すでに魂がぬけていて、人間であって人間ではない。

「兄さん……」

もともにもどすと、木崎さんは泣き出した。やはり、どんなさんなのだろう、いっしょに来た男のひとの肩につ

かまって、ふるえながら立っている。

おねえちゃんが、ぼくのそでを引っぱった。ろうかに出るといつているのだ。

ぼくらが出ていくのと入れかわりに、病院のスタッフらしき人が、書類をかかえて、おつかない顔で入ってきた。

スタッフは木崎さんに、さまざまな質問をあげせている。患者の名前、生年月日、正確な住所、健康保険、葬儀の予定、お金の問題……などなど。

しばらくして、スタッフと木崎さんはいっしょに出てきた。スタッフは足音高きかを去っていき、木崎さん夫妻はうんざりした顔をしている。

暗いロビーの一部だけ灯りがついている。ソファアにすわり、ぼくらは木崎さんの話を聞いた。

「増山権吉？」

おねえちゃんが、冷たい缶コーヒをにぎりしめ、変な顔をした。

「それが兄の名前です。」

木崎さんは、うなずいた。

少尉の本名は、増山権吉というのだ。

「あたしたちは、『少尉』と呼んでました。増山さんがそう呼べといっていましたし、軍服姿の写真も見ましたから。」

「兄らしいわ。」

コーヒを口にして、木崎さんは続けた。

「『少尉』というのは、私たちの父、増山権太郎少尉のことです。兄は戦争になど行ってません。」

「ええっ！」

おねえちゃんは、あやうくコーヒを落っこしそうになった。

「じゃ、じゃあ、あの写真は少尉……いや、権吉さんのお父さん？」

「そうです。兄は父の軍服姿が、とても好きでしたから、大事にしていたのでしょう。」

「はあ……」

おねえちゃんは、気がぬけたように返事をした。今の今まで帝国軍人だと思っていたひとが、軍人の子どもだったのだ。

子ども？ ぼくはおじいさんの話を思い出した。

「おねえちゃん。大むかし、何十年前前、おじいさんが

池尻の洋館で見た子どもって言うのは……」

「あつ！」

片手をロビーのテーブルについて、おねえちゃんは立ち上がった。

「男の子と女の子！」

ぼくらは木崎さんを見た。

「それ、きつと私と兄ですね。」

木崎さんはさびしそうに笑った。

「あの洋館の中を見ましたか？」

木崎さんは真剣な表情でおねえちゃんを見た。

おねえちゃんは、まっすぐに木崎さんを見て、しばらくしてから答えた。

「あ、はい。リビングだけですけど。」

ウソをついている。何やらカンが働いたのだろう。

「いろいろと変なものがあったでしょう。黒板とか地図とか。」

「ありましたありました。大東亜の地図とか、古い教科書みたいなものとか。」

「やっぱりねえ……」

木崎さんは何かあきらめたような顔をしている。

「あの戦争……あ、ごめんさい。チャコさんにはわからないわね。太平洋戦争、つまり第二次世界大戦が終わったとき、日本は何もかも変わりました。戦争に負けたんですから、当然です。」

きのうまで悪だとされていたものが正しいことになり、正義だとされていたものが悪になってしまったのです。学校だって変わりました。それまで教えていたことが、全部うそだとか、まちがいに変わってしまったのです。軍国主義はなくなり、自由の風が吹きこんできました。

でも、そんな状況に納得できない人たちもいました。私の父もそうでした。父、増山権太郎少尉は、戦争が終わると私たちといっしょに、あの洋館に引きこもってしまったのです。

私も兄も学校へ行くことは許されませんでした。そのころ学校では、民主主義の教育がはじまっていたはずですが、私たちは父によって、戦争中の軍国主義教育をたたきこまれたのです。

兄は父の教育どおりに、立派な少国民になってしまいました。知ってます？ 少国民。」

「少尉……権吉さんが、あたしたちのことをそういつて

ました。」

「国をあげて戦争をしていたので、子どもたちも戦争を支えるように、また立派な軍人になれるように、ただ、それだけの人間として教育されていたのです。」

私と兄は、洋館のそばに住んでいる子どもたちと、しばしば口論になりました。教えられていることが全然ちがうのですから、当然です。

やがて兄はだれともつきあわなくなりました。友だちがひとりもいなくなってしまうのです。でも、わたしは、親しくしてくれる子がいました。それでだんだん、父や兄の教えに嫌気がさしてきたのです。

ある日、私はついにあの家を飛びだしました。苦勞しましたけど、今の主人とも知り合い、なんとか人並みの生活を送れるようになりました。

子どもも生まれ、静かに暮らしているとき、一応、住所だけ知らせておいた兄から連絡がありました。父の死です。

父、増山権太郎少尉は二十年ほど前に亡くなりました。誰も参列しない、さびしいお葬式でした。

驚いたのは、兄が父そっくりになっていたことです。父が兄に乗り移ったのではないかとさえ、思いました。それ以来、私は一度もあの洋館に行つたことはありません。私には孫もいます。もうすっかりおばあちゃんです。

でも、そんなに時間が経つたというのに、今でも目の丸を見たり、君が代を聞いたりすると、ゾツとするのです。」

時計の音がカチコチと聞こえる。ロビーは静かで、木崎さんはそれつきり何もいわなかった。

おねえちゃんは、缶コーヒーを飲むことも忘れ、あまりの話をただ、ぼうぜんとしている。

木崎さんのだんなさんが話しかけてきた。葬儀屋さんに連絡がついたということだ。増山権吉さんの遺体は、板橋の葬儀屋さんに運ばれることになった。

「どうもいろいろありがとうチャコさん。」

木崎さんはお札をいって、ぼくらをタクシーに乗せてくれた。そして、運転手さんに一万円札を渡して、池尻の洋館の住所をいった。それはもちろん、ぼくらが、近所の子どもだと思つてゐるからだ。

夜の町へタクシーは走りだした。後ろを見ると、ふか

ぶかとおじぎをしている木崎さんのすがたが見えた。

作戦会議

洋館にもどつたぼくらは、みんなの質問攻めにあつた。ユタカもトシキもユカちゃんも、何があつたか聞いてくる。

「とにかく、少尉は少尉じゃなかったのよ。だから、ちがうの！」

おねえちゃんの説明は、あつちいたり、こつちいたり、さつぱり要領を得ない。無理もないと思う。

ぼくも話に加わつて、なんとかいきさつをみんなに伝えることができた。

「少尉さん、かわいそう……。」

ユカちゃんが顔の前で両手をあわせた。

「だから、少尉じゃなくて、増山権吉さん。」

おねえちゃんは、しつこい。

「けど……。」

倉持君がしかめつつらをした。

「その木崎つてひと、高射砲の話はしなかつたんだろ？」

「うん。」

ぼくはうなずいた。

「知らなかつたのかな？」

「あたしはちがうと思う。」

おねえちゃんが、アゴに手をあてた。

「他人に教えたくなかつたんだと思う。大騒ぎになるもの。」

「高射砲はどうなつちやうのかなあ。」

トシキがつぶやいた。

「あんたはどうしたいの？」

「わかんないよ。ただ……。このまま、なかつたことにして、それでいいのかな……と。」

みんなが押し黙つた。

おねえちゃんが腰に手をあてた。それから、奥のほうへ歩きだして、ろうかをずつと行き、例の部屋のドアを開けた。

高射砲の部屋だ。にぶい光を放つ砲身が、高だかどームの天井へむいている。床は円形にくぼんでおり、本物の砲弾がおうぎ型にならんで、いつでも発射できるようになっている。

後ろからついてきていた、ぼくらを、おねえちゃんはふり返つた。

「一発だけ、撃つちやだめかな？」

指を一本立てて、おねえちゃんは上をむいた。

「そんなむちゃな！」

ぼくは、さけんだが、おねえちゃんは続けた。

「こう、空へむけて撃つんだよ。誰にも迷惑がからなないように。そうすれば、少尉——、増山権吉さんの無念も晴れるんじゃないかなあ。」

「叩砲か。」

倉持君が黒いメガネをあげた。

「チョウホウ？」

「人が死んだら、とむらいの大砲を撃つんだ。」

「うん。それだよ。増山権吉さんも、本物の少尉、つまり権吉さんのお父さんも、なんというか、うらみをいだいたまま、死んじやつたわけでしょ。パーツと火花のようなもので、おとむらいしてあげてもいいんじゃない？」

「賛成です！」

ユカちゃんが両手をくんで、乙女のいのりをささげた。

「このままじゃ、少尉さんは死んでも死にきれないと思ひますわ。」

「だから、少尉じゃなくて増山権吉さん。」

おねえちゃんは、しつこい。

「けどよ。」

トシキが頭をぼりぼりとかいた。

「爆発した破片は落ちてくるんだぜ。」

「えつ、そうなの？」

「あたりまえだよ、おねえちゃん。」

ぼくはちよつとはらはらしていた。何だかおかしな方向へ話がいこうとしている。

「なんとかならないか？ 最後に見た、権吉さんの顔が、忘れられないんだよ、あたし。」

おねえちゃんは、本気でなんとかならないか、という顔をしている。

「そうだな。風むきにあわせて、角度や高度を調節してやれば……。」

倉持君が、ぶつぶつとつぶやいている。

「でも、どこに落とすべきか……。()は住宅地のまん中で……。」

なおもぶつぶつ、つぶやいている。

ぼくはここで、つい、本当に、つい、なんだけど、ひらめいたことを口走ってしまった。

「世田谷公園。」

みんながぼくを見た。

倉持君が口をひらく。

「おおつ、さすがはケンジ！ そうだよ。世田谷公園に破片を落下させればいいんだ。夜中なら誰もいないはずだし、すごく都合だ！」

「できるの？ うまくそこへ落とすのは。」

おねえちゃんが興味しんしんの顔をする。

「できるはずだ。風向の観測システムはととのっているし、角度と高度を調節して、世田谷公園上空で爆発させてやれば、破片はみんな公園に落ちるはずさ。」

倉持君のことで、みんながワツと盛り上がった。ぼくは、とりかえしのつかないことをいったと思い、ひたいに手を当てた。

「ねえ、音楽を流しましょう。」

ユカちゃんが、またわからないことをいいた。

「少尉——、権吉さんが好きだった曲を流しながら、弔砲を撃つよ。音楽にのって夜空に花火が散るの。なんてすてきでしょう。」

「あの人が好きなのはベートーヴェンだね。不滅のアレグレットはちよつと……。」

「チャコさん。ベートーヴェンなら、第九だろう。」

トシキがもつともなことをいった。

「年末じゃないけどねー。真夏の第九かあ。うちのパパが好きなよ。第4楽章の合唱を、体操しながら見ている。」

「体操じゃなくて、あれは指揮をしてるんだよ。おねえちゃん。」

かくして、ベートーヴェン第九番第4楽章とともに、弔砲を撃つことになってしまった。とんでもない成りゆきに、ぼくは軽いめまいを感じていた。

真夏の第九

増山権太郎少尉が死んだのは二十年ほど前だ。ちょうど、この高射砲が大改造されたころだと思ふ。権太郎少尉とむすこの権吉さんは、ふたりで協力して、高射砲の自動化をなしとげたのだ。

当時としては、最新のコンピュータを使って、より簡単に動かせるように改造した。倉持君によれば、もともとの高射砲は、子どもに撃てるようなしろものではないらしい。

とにかく、ぼくは倉持君といっしょに、弾道計算のプログラムを見ていた。白黒のモニターに放物線が映しだされている。世田谷公園に破片を落下させるための、発射角度、爆発高度をいろいろとためしているのだ。

おねえちゃんが、別の部屋から飛びこんできた。

「レコードがあつたよ。『ベートーヴェン交響曲第九番・合唱つき』。CDじゃないんだね。」

歓喜よ、神々の麗しき靈感よ

天上の樂園の乙女よ

我々は火のように酔いしれて

崇高な汝の聖所に入る

汝が魔力は再び結び合わせる
時流が強く切り離れたものを
すべての人々は兄弟となる

抱き合おう、もろびとよ！

この口づけを全世界に！

兄弟たちよ、この星空の上に
父なる神が住んでおられるに違いない

もろびとよ、ひざまずいたか

世界よ、創造主を予感するか

星空の彼方に神を求めよ

星々の上に、神は必ず住みたまおう

解説を読むと、フルトヴェングラーというひとが、1951年に指揮したと書いてある。よく知らないが、有名な指揮者じゃないだろうか。

「おねえさま。こつちにプレイヤーがありますわ。」

ユカちゃんによばれて、おねえちゃんは、小さなドアをあけた。

「ははあ。今まで、この洋館に流れていた音楽は、ここから流されていたんだね。」

「そうですね。あちこちにスピーカーがありますもの。」

「どこかで、レコードって、どう使うの？」

「わたしも知りません。」

ふたりが悩んでるところに、トシキが通りかかった。

「あ、これかけてよ、トシキ君。」

「へっ？」

彼はレコードをうけとり、セットして、スイッチを入れた。ターンテーブルがぐるぐる回りだした。

「わあ、すごい。」

「で、そのあとどーすんの？」

トシキはこまった顔をした。やがて思い出したらしく、アームを持ちあげ、慎重にレコードの「まん中」に針をおろした。

「音がしないね。」

「なんでだろう。」

ぼくは少しいらいらしてきて、声をあげた。

「はじだよ！」

「あ、そうか。」

トシキはレコードのはじっこに針をかけたおした。とたんに音が出た。

「テンポがちがうんじゃない？」

「なんででしょう。きゆるきゆるいつてるわ。」

「45じゃなくて、33回転にするの！」

ぼくはまた声を出した。

「あれがスイッチを切りかえたらしく、まともな音楽が聞こえてきた。」

「ケンジ、あんたかわしいねー。」

「学校の放送室にあつたでしょ。」

「ふうん。」

倉持君は、数値をあれこれ変えている。グラフが、世田谷公園までの距離に、ぴったりの位置に来る数値を探

しているのだ。

「この数字。どう思う？ ケンジ。」

「これじゃないと思うよ。」

「問題は風むきだなあ。」

今夜は微風だ。ほとんど風がない。レーダーで雲の動きから上空の風を観測しているのだが、現在のデータはほとんど無風に近いと出ている。だが、この状態はいつまで続くかわからない。

時計を見ると、午前二時をまわっている。日付が変わったので今日は八月十五日だ。そういえば、終戦記念日だなあと、ぼくはぼんやり考えた。

「キミたち。計画はまとまったかね？」

おねえちゃんが、後ろからぼくらの肩をたたいた。

「数字は出た。撃つのなら、今この状態がベストだよ。チャコさん。」

「ようし決まった！ 十分後、午前二時半に砲撃開始するよ。総員配置につけ！」

あちこちで、「了解」の声が飛んだ。

ユカちゃんがレコードをかけ、ベートーヴェン第九番第4楽章がはじまった。まだ合唱はない。オーケストラの低音が、不気味に洋館に鳴りひびく。

おねえちゃんが、壁についてる小さなレバーを下げた。

「それなに？ おねえちゃん。」

「こうすれば、玄関の扉にカギがかかるんだって。もう、だれにもじやまされなわけ。」

「あ……そう……。」

本当に撃つのだ。撃ってしまふんだ。ぼくの背中がびりびりと緊張してきた。

倉持君は、少尉——増山権吉さんが立っていた場所について、機器をのぞきこんでいる。

「ケンジ。データを報告しろ。」

ぼくはモニターの数値を読み上げた。

「風速〇・一、風向東北東、気温二十四度、湿度六十五、すべて異常なし。」

「目標、高度二千四百、方位西南西、仰角83。」

「了解、方位西南西、ドーム回転します。」

有名なメロディがしだいに高まってきて、室内がコンサートホールのように反響した。

トシキが壁のハンドルを回した。天文台のドームのような天井が、ゆっくりと回転をはじめた。

続いて、砲自体もゆるやかに動いて、西南西へ向いた。

「ドーム回転終了」

みんながおねえちゃんを見る。

「安全装置を解除。ホントに撃つよ！」

みんなの間に、ものすごい緊張感が走った。一瞬の静けさ。それから、男性の独唱が、ドーム内にろうろうとひびいた。第九の合唱のはじまりだ。

「安全装置確認、解除します。」

ユカちゃんが床のレバーを、半回転させて押しこんだ。

「自動装填開始」

混声合唱がはじまった。年末によく聞くあまりにも有名な合唱だ。砲弾の一つが台に乗ってせり上がってくる。高射砲の下の部分にスライドされ、砲の中に押しこまれた。

「ドームを開ける。」

「ドーム開きます。」

トシキが別のハンドルを回した。ドイツ語の大合唱にあわせて、屋根がまっぶたつに割れて開いていく。

「模擬照準自動追尾、ユリオリの力、入力されていきます。計算終了、発射準備完了しました。」

ぼくの声で倉持君が、おねえちゃんを見た。ここにいる全員が、おねえちゃんを見ている。

時計は二時半をさし、歌声はピークにたつした。神よ。

兄弟たちよ！

「発射あ！」

おねえちゃんがさけび、倉持君がスイッチを入れた。轟音とともに、高射砲が振動した。

煙がすごい。耳がバカになりそうだ。

直後、はるか上空で何かが光り、雷鳴のような爆発音が聞こえてきた。成功だ！

「やった！」

おねえちゃんが、煙をはらいながら、西南西の夜空を指さした。

「第二弾が装填されていく！」

トシキの声で、ぼくらは下を見た。なおも合唱はつづいている。アームが二発目の砲弾をすくいあげ、有名な旋律にのって、高射砲へ装填されようとしていた。

「バカな！」

倉持君はさげんだ。一条ユカは安全装置を引き上げよ

うとするが、びくともしない。

どうにもならない。倉持君はあれこれ機械をいじったが、第二弾は装填された。

おねえちゃんが、両手で耳をふさいだ。みんながまねをした。直後、ものすごい音がして、第二弾は発射された。

「また動いている！」

トシキがさげんだ。ドーム内に煙がたまってきて、視界が悪い。

トシキとユカちゃんが安全装置にとりついたが、高射砲はどうしても止まらない。

煙の中で緑色に光るものが見えた。おねえちゃんの胸のペンダントだ。

「おねえちゃん！ カウストウバが光ってる！」

「なんでよ！」

恐ろしい音がして、第三弾が発射された。笛の音が聞こえ、曲は間奏のようなところに入っている。もう事態はめちやくちやだ。

倉持君は機械をぶん殴っているが、高射砲は止まらない。おねえちゃんが部屋のすみのイスをふりあげ、思いっきり、管制機械にたたきつけた。火花が飛び散り、どこかショートしたらしく、配電盤が火を吹いた。

火は壁紙に燃えうつり、炎がひろがった。そんな状態で第四弾が発射された。

煙で、もう何も見えない。だれもが、ごほんごほんとききこんでいる。

「逃げよう！」

さげんだがはいか、おねえちゃんはドアをあけて部屋の外に飛び出した。みんなで、ろうかに転がり出て、リビングにむかうが、もうもうとした煙が追いかけてくる。

次の砲弾が発射された音がして、みんな耳をふさいだ。リビングも煙が充満してしまい、全員玄関のドアにとりついた。ところがドアがあかない。

ノブをまわしても、押ししても引いてもたいたいても、ドアはあかない。

「おねえちゃん、さつきカギかけたじゃないか！」

「あつ、そうか。」

そのとき、ぼくの口からマントラが出た。

「オー………、ハレー・クリシュナ・スタパティ

ア・ハレー……シッデイ・マハー・シッデイ！」

まわりの空間がぐにやりと曲がり、ぼくら五人は、洋館の外の住宅街に放り出された。

「で、出られた。」

「なんで、なんで？」

ユカちゃんが、せきこみながら聞いた。みんなごぼごぼとむせている。

「あ、あれ！」

おねえちゃんが、目の前の洋館を指さした。ドームの部分で燃えあがっている。完全な火事だ。

また砲弾が発射された。ドームの屋根から煙があがり、振動が外まで派手につたわってくる。

近所の住民たちが、何十人も見物している。だれもかれも、何ごとが起こったのかわかりかねて、ぼうぜんと洋館を見ている。

ぼくは音楽が鳴りひびいているのに気がついた。第九の歌が、住宅地全体にひびきわたっている。どう考えても防災無線からの音だ。理屈はわからないが、レコードの音が、防災無線から出ているのだ。

池尻一帯、いや、世田谷全体で、第九の歌が鳴りひびいているのかもしれない。

おねえちゃんの「カウストゥバ」は、ますますあやしく光り、このとんでもない怪現象の原因であることを証明している。

再びあの有名な大合唱になった。男女の混声合唱が、神と人類愛の喜びを歌い上げている時、またしても砲弾は轟音とともに発射された。

「ど、とうなつちやうの。」

おねえちゃんはシヨックをうけている。

「砲弾を撃ちつくす前に、火事の火がまわったら、地上で砲弾が発射する。」

倉持君が、ごくりとつばを飲みこんだ。

「爆発したらどうなるの。」

「あたり一帯の住宅地が吹っ飛ばす。何人死ぬかわからない。」

それつきり倉持君は、自分のことばに固まった。

「みんな、246へ！」

おねえちゃんは、みんなをつついて、大通りへ出た。

「ケンジ。砲弾は何発あったの？」

「十三発。」

ぼくらは小声で話した。

防災無線の歌は、賛美歌みたいになり、神々しいまでの声がひびきわたる。パトカーと消防車のサイレンが聞こえてきた。

「タクシーを止めよう。」

おねえちゃんは、指を三本立てて、タクシーをひるおうとした。ぼくの口からマントラが出た。

「オー……サハ……ナウ……ヴァアトウ……サハナウ……ブナクトウ……ハレー……シヤクニ（賭けごとの神）！」

ブレイキ音が聞こえ、たてつづけに三台のタクシーが止まった。

「なに？ なんなの？」

「こんな夜中に三台も？ ものすごい確率だぜ。」

ユカちゃんとトシキが、びつくりしている。

また、洋館の方から発射音が聞こえた。

「十二発目だ。おねえちゃん。」

「無事に全部発射されますように……。」

おねえちゃんは、みんなのほうをふり返った。

「いい、みんな。あたしたちがここで会っていたことは誰も知らない。誰にも言っちゃいけない。わかった？」

ユカちゃんもトシキも倉持君も、みんなうなずいた。

「このあと絶対、連絡を取りあってもいけない。とにかく、ここであつたことは忘れるの。」

誰もかれも悲しそうな顔をした。無理もないと思う。

「ただ、これから警察とか、この怪事件を調べるのだ。犯人がぼくらだと、絶対ばれてはいけない。」

十三発目の発射音がした。

「はあ……。」

おねえちゃんと倉持君が、同時に気がぬけた顔をした。

「最悪の事態は避けられたね。ユタカ。」

倉持君はうなずいた。顔がまっ青だ。

おねえちゃんは、トシキをタクシーに押しこんだ。

「いい？ 遠くへいっても元気であるんだよ。あつちは寒いから気をつけて。」

「えっ？ おれの引越しのこと、知ってるの？ 不思議なひとだなあ。」

続けて、倉持君を別のタクシーに押しこんだ。

「お金、持つてる？」

「自分ちまでなら、だいじょうぶだ。」

「あんた、将来技術者になって、でっかいことをやるよ。きつと。」

いわれた倉持君は、めずらしく照れた顔を見せた。彼のある顔を見たのは、はじめてだった。

さらに一条ユカを、これまた別のタクシーに乗せた。

「おわかれなの？ おねえさま。」

ユカちゃんは、泣きそうな顔だ。

「ユカちゃん。こんなことばがあるよ。 会うは別れの……。」

「……ええと、なんだっけ？」

「『始め』だよ。おねえちゃん。」

「そうそう、 会うは別れの始め』だよ。別れのときは必ずくるの。」

おねえちゃんにしているいいことをいう。

「元気でね。ユカちゃん。」

「はい。おねえさま。ケンジくん。」

ユカちゃんは、ぼくのほうを見て、涙をぬぐった。この美少女とも、もう会えない。

そのとき、またしても砲弾を発射する音が聞こえた。

「ケンジ！」

「ごめん！ 数えまちがえてた！」

「タクシー、発進して！」

おねえちゃんの合図で、三台のタクシーが動き出した。

それぞれ、羽根木、豪徳寺、成城へむかうのだ。

別れた三人は、二度と会うことはないだろう。

夏の終わり

夜が明け、昼近くになって、ぼくは自分のベッドから起き上がった。

階段をおりていくと、お母さんが声をかけた。

「夏休みだからって、あんまり不規則な生活をしてちゃだめよ。」

「うん。」

リビングでは、おじいさんが高校野球を見ている。

投手戦が退屈だったのか、あくびをひとつして、おじ

いさんはチャンネルを変えた。

ワイドショーをやっている。ゆうべの池尻の怪事件だ。ぼくはテレビを食い入るように見て、大急ぎで、ろうかから階段を駆け上がった。

おねえちゃんの部屋に飛びこむと、まあ、すごい寝相で寝ている。毛布は床に落ち、まぐらはあさつてに転がり、おねえちゃんは、タコみたいに手足を複雑にからませて、横になっている。

「おねえちゃん、おねえちゃん！」

「んん？」

「ゆうべの事件、テレビでやってる。」

おねえちゃんは、がぼっと、はね起きた。そのまま下着姿で、階段を駆けおりにいく。

「なんじゃ、チャコ。はしたない。」

おじいさんはとてもいやな顔をした。パンツとブラジャーだけのかっこうで、おねえちゃんは、じーっとテレビを見た。

——犯人と思われる人物は、事件が起こったとき、すでに死んでいることが確認されました。まさに怪事件といつていいでしょう。

池尻の洋館が映った。火事で全焼している。

大東亜の地図も、黒板も、戦前の教科書も、竹やりも、拳銃も、そして高射砲も、何もかも灰になってしまったのだ。

——続いて、世田谷公園からお送りします。

画面が世田谷公園に変わった。ぼくもおねえちゃんも、「あつ」と声をあげた。

あの、アメリカから送られたモニュメントが、むざんに粉ごとなつている。

あたり一帯に、砲弾の破片が落ちたらしく、立木は切りさかれ、地面は穴だらけだった。銅像は、かろうじて台座だけ残っているが、それもいくつかに割れていた。

ぼくは、おねえちゃんの胸の「カウストウパ」を見た。少尉——、増山権吉さんは、死にぎわに、この宝石にさわったのだ。

権吉さんと、その父親、増山権太郎少尉の怨念が、そもその原因にちがいない。

世田谷公園一帯には、大量の破片が落ちたらしく、かなりの樹木がなぎ倒されていた。子どもたちに人気のミニSLがあるが、その数百メートルの線路はめちやめちやだ。鉄はひん曲がり、切断され、駅に大穴があいてい

る。

——SLの復旧の見こみは、まったく立っていません。いったい誰が、こんなむごい事件を引き起こしたのでしよう。

おねえちゃんは、ぼりぼりと頭をかいた。誰でもない。この人だ。いや、ぼくにも責任はあるのだけど。

おじいさんが、いやーな顔をして、うなった。

「これではまるで……。」

「まるでなに？」

おねえちゃんが聞いた。おねえちゃんとおじいさんの目があつた。

「空襲のようだといいたいんじや。おまえらにはわからん。ええい、あつちへ行け。わしや野球を見るんじや。」

おじいさんがチャンネルを変えて、画面は高校野球になつた。

ぼくとおねえちゃんは、キッチンへ行こうとした。そのときテレビから、サイレンの音が聞こえてきた。きょうは終戦記念日だ。

「十二時だよ。おねえちゃん。」

こくんとうなずいた、おねえちゃんは、黙とうをささげた。ぼくも頭を下げた。もう、皇居のほうをむくことはなかつた。

夏がすぎっていく。あれから何日もたつたけど、警察が事件解明のヒントをつかんだとか、そういう話は全然聞かない。事件は謎のまま終わるんだらう。マスコミの興味も消えてしまった。

トシキはとつくに田舎に行ってしまっただろうし、倉持君は、きつと難しいITの本でも読んでるのだろう。一条ユカはどうしてるかな。お嬢さまとして、やつぱり優雅にふるまっているんだらうな。

みんなと会うことは、二度とないだろう。もし会ったとしても、その時はとつくにおとなになつてにちがいない。

ぼくは、夏休みの宿題を完全にかたづけた。ノートを閉じて、遊びに行こうとすると、ろうかでおねえちゃんとバッタリ会つた。

「ああ、ケンジ。あんたを呼びに行こうとしたの。」

「なに？ おねえちゃん。」

「なんか、等々力のほうに、謎のお化け屋敷があるんだつて。これから真紀ちゃんと探検に行くんだけど、あんたもついてきて。」

「……………」

「古い洋館でね。中に入った子どもは、二度と出てこないなんて、不気味なウワサもあるんだよ。おもしろいでしょ。」

おねえちゃんは、おうど色の服と半ズボンに帽子をかぶり、すっかり探検家のかっこうをしている。

「おねえちゃん。そういうのには、もう、かわらないほうが……。」

「あたし、これを夏休みの自由研究のレポートにするつもりなんだ。時間がないのよ。時間が。」

おねえちゃんは、むんずとぼくの腕をつかみ、そのまま玄関に出て、ドアを開けた。

明るい夏の光が差しこんでくる。

おわり

(C) 2010 immagawa. All rights reserved.